ワルシャワ日本人学校での国語実践

(1991年4月から1994年3月までの活動と実態を中心に)

寺本　学

今年は(1996年)5年ぶりのショパンコンクールについて日本でも次のように報道された。

『日本から約50人が応募し、ポーランド人と同じ23人が予備審査に残った。そして、本選では、見事に5位に入賞した。』

また、11月21日付けの新聞には次のようなニュースが流れた。

『ノーベル平和賞受賞のワレサ氏を旧共産系のクワシニエフスキ氏が小差で敗り、ポーランド大統領に初当選。』

これらの記事やテレビのニュースでポーランドが報道される度、三年間すごしたポーランドでの生活が思いだされてくる。

これから紹介していくいくつかの実践は『自分が住むことになったその土地や国、ここではポーランドという国や文化・人々と自分自身や子供たちをかかわらせようと考え、実践したこと』とまとめられるかもしれない。

もちろん、海外にある全ての日本人学校の児童・生徒たちがこれから述べるような状況にあるわけでもなく、現在のポーランドの日本人学校がその後どのような状況に変化したのかも定かではない。しかし、この当時、私や児童・生徒たちが何を考え共に歩もうとしたかは考えていただけると思う。

東京法令出版の月刊国語教育11月号に文部省初等中等教育局教科調査官・相沢秀夫氏が国語教育界の動向として、海外における国語教育や日本人学校などについて次のように述べている。

「現在国際化の進展に伴って、海外に長期滞在する義務教育段階の子供の数は、平成6年度現在、約5万人に達している。(中略)…そして、何年かの海外での長期滞在の後に、日本に帰国する海外子女の数は、平成5年度の場合で1万3千人に上る。こうした子供たちの課題は、日本に帰国した時の進路や進学の問題である。…日本人学校は、国内の小学校や中学校と同じような教育を行うことを目的とする全日制の教育施設である。日本の学習指導要領に基づき、日本から派遣された教員と現地採用の教員が日本の教科書を使用した教育を行っている。異国の地に国内の小学校や中学校がそのまま移ったという感じのする教育機関である。…」(傍線筆者)

確かにワルシャワ日本人学校も、ポーランドという国にはあるけれども、学校は日本以上に日本的であることを求められているように思われた。

しかし、本当にそれで良いのだろうかという思いが徐々に私の中にふくらんできた。

以下にこれから述べる実践のもとになった、ポーランドという国とワルシャワ日本人学校、そして、そこに生活している子供たちについての概要や実態を述べていく。

私が赴任した1991年4月12日

フライト計画表(SAS/Scandinavian Airlines)

都　市	月　日	出発時間	便　名
TOKYO (Narita)	Apr.11 (Thu)	21:30	SK-980
(Via Anchorage)	Apr.12	06:45	
COPENHAGEN	(Fri)	10:25	SK-751
WARSAW		11:40	

(まだ北回りのため日本→アンカレッジ→コペンハーゲン→ワルシャワと約22時間の旅だった)

晴天の中に広がるワルシャワの街、しかし、まだまだ春というには遠い、灰色の街であった。倉庫のような旧オケンチェ国際空港につき、モスグリーンの兵士(もちろん銃を持って構えた)の監視の中で親子3人不安がつのったのを思い出す。

ポーランドの食料品店

街に出ても、店という店には鉄格子がはめられ、重い鉄の扉を開けて店に入るのもためらわれた。もちろん自分の手で商品を手に取って買うことなどは程遠いことで、カウンターの向こうに並ぶ商品を見るためには、ポーランド語を話せることが必要最低条件となる。私達家族が最初に覚えたのは(これ「トー」いくら「イ

レ」見せて下さい「プロシェン　ポカザチ」はい「タク」いいえ「ニエ」…）だったと思う。

思えば、赴任1年目にはまだ買い物旅行という制度が公にあり、隣国（ドイツやオーストリア）に衣料、下着（いい綿製品が特に少なかった。そして、私たちは日本から送った引っ越し荷物も盗難に遭ったのだが、なくなっていたものは、新しく買いそろえていた下着や衣料、特に子供のものは全てであった）、食料を買いに行った。今でも、オーストリアでさつまいもを見つけた時の感激と興奮は忘れない。数年前には砂糖やトイレットペーパーなども買って帰っていたそうだが、それもうなづける。

こういう生活の中で、私が第1に考えたのは、私自身と共に、児童・生徒にもさまざまな形でポーランドとの出会いを計画していきたいということであった。

はじめに

人生の中の重要な3年間を過ごしたワルシャワ。1994年3月私は次のような言葉で、ワルシャワの人々に別れを告げてきた。

離任式でのあいさつ

（前半略）

私のポーランドでの3年間は1歳と11か月で来た娘に教えられることが多かったように思います。娘にとってお手伝いさんパニ・エバ（ミセス・エバ）は、日本のおばあちゃんよりもつき合いが長くなり、ポーランド語で意志を伝えあっています。まさに、ポーランドのバブチャ（おばあちゃん）となりました。

また、ポーランドの幼稚園に通園した娘にとって、髪の毛や目の色が違うのは普通のこと。日本人だからとか、ポーランド人だからというこだわりなどありません。他の国に旅行した時も、日本語を話さない人はすべてポーランド語で通じると思っているのでしょう。遊園地で遊びながら一生懸命ポーランド語で話しかけています。

ポーランドの幼稚園にて
3才児グループ　給食風景

私は、この娘に勇気づけられることも多く、日本と比較するのではなく、ポーランドを丸ごと受け入れようとしている姿に感激しました。

学校では1年目には生まれて初めて小学生の担任をさせてもらいました。2年目には中学生の担任として8名の中学生とともに学校を支える力になれたように思います。3年間、やり足りない面もたくさんあったと思いますが、どうかお許し下さい。

赴任するまでは、はるかに遠い国だったポーランドで、私はたくさんのすばらしい方々と出会い、ポーランドを近くに感じ、好きなままで帰国することができます。この幸せな気持ちを、日本で、中学生たちに少しでも伝えていくことが、私の次の仕事だと考えています。3年間、ありがとうございました。さようなら。

上記のような私の気持ちを1人でも多くの日本の人々に伝え、また、国際社会に向かって羽ばたいていく児童・生徒の教育に携わる先生方の参考になればと考えている。

そして、在外教育施設のひとつであるポーランドのワルシャワ日本人学校における国語科としての実践活動の紹介と、海外の子供たちが置かれている言語環境と日本人の生き方について下記のような構想で触れてみたいと考えている。

全　体　構　想

Ⅰ．在外教育施設とその児童・生徒について
- **1．ポーランド概要**
- **2．ワルシャワ日本人学校の概要**
- **3．ワルシャワ日本人学校の児童・生徒の言語環境**

Ⅱ．在外教育施設のなかでの国語科実践
- **1．交歓会の場を借りて**
- **2．ワルシャワタイムで子供を変える**
- **3．朗読・群読とクラッシックミュージック**
- **4．ポーランド語に親しむために**
- **5．書道による国際交流**

Ⅲ．おわりに

以上のような構想の中に、ポーランドでの体験や感想を交えながら述べていきたい。

Ⅰ．在外教育施設とその児童・生徒について

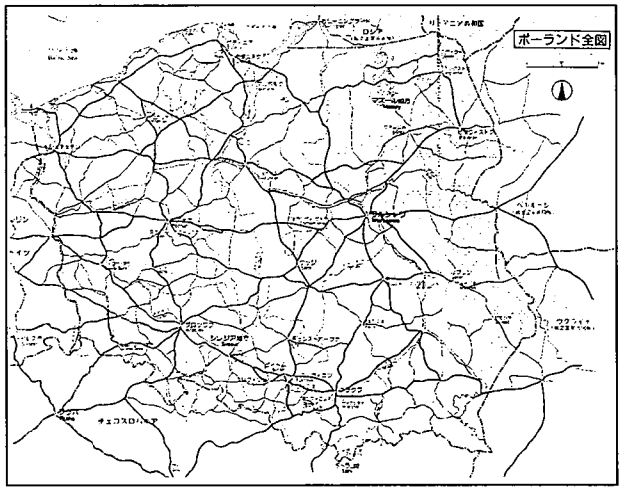
1．ポーランド概要

皆さんは、ポーランドという国をどのくらいご存じだろうか。

私は、恥ずかしながら、1991年に赴任するまで、ポーランドという国や国民についてほとんど知らなかった。そして、ポーランドについて調べようと思っ

ても、日本においては、現在のポーランドに関する情報や資料が実に少ないことに驚かされた。だから、ポーランド・ワルシャワと聞いて、私の頭にまず浮かんだのは、「貧しい国民と行列する人々。物のない国。そして、マイナスの日が続く酷寒の地」ということだった。生活への不安が頭をもたげ、本当に3年間も生活していけるのか、健康は保てるのか、家族はいったいどうなるのだろうかと、悪い方へ悪い方へと考えが広がっていくばかりだった。

ポーランドという国、ポーランド共和国は、ヨーロッパのほぼ中央にある。(しかし、日本人にとってはなぜかこの事実は不自然な感じがするに違いない。) 東には旧ソ連 (ウクライナ、ベラルーシ、リトアニアなど)、西にはドイツ、南にはチェコスロバキア、北はバルト海に面した国である。そして、東欧の中で一番大きな国土を持つ国でもある。その国土は31万平方キロメートルで、日本の本州と北海道を合わせたぐらいである。



ポーランドという名は、ポルスカという言葉から来ている。ポレ (POLE)、これは、「平らな土地、平原」という意味である。私たち家族は、水平線は何度も見ていたが、行けども行けども山のない遥かに続く地平線を見たのは初めてで、やはり、その雄大さに驚き、異国に来ているという実感を持った。しかし、その雄大な自然がポーランドにとっては、プラスにもマイナスにもなったのである。

1) 『森へ行きましょう』

この歌は、日本人学校のキャンプやポーランドの学校との交歓会の時によく歌った。また、ポーランドの生徒たちが学習発表会でポーランド語と日本語で歌ってくれたのも印象深く耳に残っている。

森へ行きましょう　娘さん　アハハ
　鳥がなく　アハハ　あの森へ　ラララ
ぼくらは木を切る　君たちは　アハハ
　草刈りの　アハハ　仕事しに
ランラララン　ランラララン　ララーララ (後略)

日本人ならだいたい知っているこの歌は、実はポーランドの民謡である。この歌のポーランド語とその直訳をあげておくので、比較していただきたい。

シュワジェビェチカ ド ラセチカ ド ジェロネゴ ハハーハ
　緑の森へ行っていました
ド　ジェロネゴ　ハハーハ　ド　ジェロネゴ　ハハーハ
　緑のところに
ナポトカ ワ メシリベチカ バルゾ シュバルネゴ ハハーハ
　力持ちの (かっこいい) 狩人と出会いました
バルゾ シュバルネゴ ハハーハ バルゾ シュバルネゴ
　大変力持ちの
ララララ ララララ ララララ ララララ ララララ ララララ (後略)

近くの湧水の出るポプシンの森にて

首都であるワルシャワ市でも、中央駅から20分～30分車で行けば、雄大な自然の中に入っていける。ポルスカ (平らな土地) の上に広々と広がる大きな森、豊かな緑。特にワルシャワ市の北西にある国立公園に指定されているカンピノスの森は有名で、何キロにもわたって続くすばらしい森である。こういう豊かな自然を持つ国だからこそ生まれたのが、『森へ行きましょう』 なのだと思わせる。

2) ポーランドの持つ悲惨な歴史

ポーランドは14世紀から16世紀のヤギエオ王朝の時に非常に栄えたが、その後は衰退していく一方だった。そして、近隣のドイツ、ロシア、オーストリアに国土を分割されつづけ、1795年には地図の上から姿を消されてしまった。その後、1918年に再びポーランド国家が誕生するまで、ポーランドという国は消滅してしまったのである。

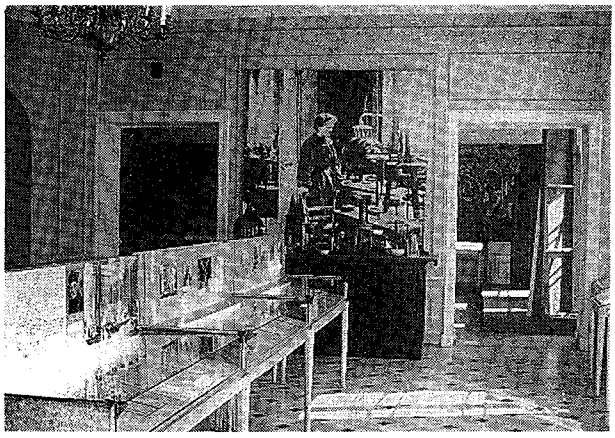
ポーランドの国歌「ポーランドはいまだ滅びず／われら生きるかぎり／外つ国の力に奪われしもの／

われら剣もてとり戻さん／（後略）」にはポーランド民族の自由を求める心が歌われている。

平原であり、豊かな農地を持つポーランドは、侵略されやすく、常にその国土は危険にさらされてきた。だから、1795年から1918年までの間、ほとんどのポーランド人は二者択一を迫られてきた。一つはドイツ化すること。もう一つは、ロシア化することだ。それは、言語においても宗教においてもそうであった。ドイツ語かロシア語か、プロテスタントかロシア正教か。

ここで、かのキュリー夫人の少女時代の逸話を思い出す。

ロシア勢力下にあったため、ロシア語を使うように強制されていた中で、学校では、ポーランド語の教育をするのをやめなかった。しかし、ロシアの憲兵が時には巡回にやって来る。ロシア語も良くできた少女マリーは、その度に機転をきかせ、先生の指示に従ってロシア語を勉強しているように見せた。ロシアの憲兵は、それを見て安心して、帰っていったという話である。



キュリー博物館にて

このように、ポーランドの国民は、国は消えても、言語と宗教を捨てないで、心の中に常にポーランドを抱き、民族の絆を保ち続けてきたのである。

現在でも、ポーランドの国民は90％がカトリックで、宗教とともに国民の生活がある。世界中に知られている〝黒い聖母〟（黒いマドンナ）は、チェンストホバにある。ポーランドの聖母マリアとして崇拝され、毎年8月には、徒歩でワルシャワから250キロの道のりを祈ったり歌ったりしながら巡礼者が集まってくる。

また、1978年にポーランドのクラコフの大司教であったカロル・ボイチワがローマ教皇ヨハネ・パウロ2世に選出され、国民からはパパ様として最高の栄誉とともにあがめられている。

ワルシャワ市内　聖体祭にてひざまずく人々

3）宗教と日常生活

(1)　「ふとる木曜日」　1994年2月10日

ワルシャワ日本人学校聴講生カロリーナの作文より

今日は木曜日。この日をポーランド人は「ふとる木曜日」と呼んでいます。

どうして、「ふとる」かというと昔、ポーランド人は、イースター（復活祭）までの時に、肉とか甘いものを食べるのがいけませんでした。だから、イースターの約1か月前の木曜日を太る日としました。その日に、いっぱい甘いものを食べようと決めました。「ふとる木曜日」は、毎年、何月何日に当たるか分かりませんが、だいたい2月頃に当たります。

ポーランド人は今「ふとる木曜日」にポンチキ（ポーランド風ドーナッツ）を食べることにしています。ポンチキは甘く、いっぱい食べます。日本でも似た日がありますか？

(注)　別の訳では、「油の木曜日」。イースター（復活祭）というキリストが復活する日まで、ぜいたくな食事をしない時期があり、その時期に入る前に、甘いものの食べおさめの日がある。

(2)　「クリスマスイブとクリスマス」

ポーランドはカトリックの国。国民の9割がカトリック信者で、日曜日には家族そろって教会へでかける。宗教が日常生活と共に息づいている国である。クリスマスカードも非常に宗教色の濃いものが郵便局や商店で、普通にたくさん売られている。

クリスマスは、キリスト教文化圏の人々にとって最大最高の祭りの一つで、救

世主キリストの誕生を祝うものである。だから、クリスマスにむけて11月末から街中がにぎやかに活気づいてくる。街中のネオンも明るく輝き街のあちこちで、ツリーや飾りが売られる。

また、12月6日はミコワイキ（ポーランドでは、サンタクロースはシュフェント・ミコワイという）といってサンタクロースの名前の日である。

Grudzień（12月）

Poniedziałek	Wtorek	Środa	Czwartek	Piątek	Sobota	Niedziela
			1 Eligiusza Natalii	2 Balbiny Paulliny	3 Franciszka Ksawerego	4 Barbary Piotra
5 Krysyna Saby	6 ● Emiliana Mikołaja	7 Ambrożego Marcina	8 Marii Wrzgiuszu	9 Leokadii Wiesława	10 Daniela Julii	11 Damazego Waldemara
12 Adelajdy Aleksandra	13 Lucji Otylii	14 Alfreda Izydora	15 Celiny Walerana	16 Albina Zdzisławy	17 Łazarza Olimpii	18 Bogusława Gracjana
19 Dariusza Urbana	20 Bogumiły Teofila	21 Tomasza Tomisława	22 Honoraty Zenona	23 Sławomiry Wiktorii	24 Adama Ewy	25 Boże Narodzenie
26 Dionizego Szczepana	27 Jana Maksyma	28 Cezarego Teofili	29 Dominika Tomasza	30 Eugeniusza Irminy	31 Melanii Sylwestra	

（カレンダーに記された名前の日）

それを祝って、この日には子供達はプレゼントを親からもらう。そのためにポーランドのおもちゃ屋さんは1週間ぐらい行列が続き、また、幼稚園でも小学校でもプレゼント（チョコレート程度）をもらって帰ってくる。ホインカ（クリスマスツリー）は11月末からあちこちで飾られ始め、各家々でも外からも見える様に窓辺に飾られることが多い。もちろん本物のもみの木もたくさん売られ、それに飾りつけをする家も多い。この樹の香りでクリスマスを感じる人も多いのである。また、プレゼントはこのクリスマスツリーの下に置いておく。

ワルシャワ日本人学校の生徒の作った短歌の中にもクリスマスの様子を見ることができる。

●クリスマス街はキラキラ輝いてカトリックの国ポーランドにいる　　福井　洋介（6年）

●ホインカ（クリスマスツリー）を飾り輝く家々でサンタを待って窓開ける子　ブランカ（中学1年）

●バウバンカ　ポーランド語の雪だるま　にんじんの鼻　石炭の目　　ブランカ（中学1年）

このクリスマスイブの日には、ポーランドの人々は肉を一切食べない。その代わり豪華な12品目の料理を作る。鯉料理、鰊料理、ピエロギ（ポーランド風ギョーザ）、バルシチ（野菜煮込みスープ）、きのこスープ、ビゴス（伝統の野菜煮込み料理、キャベツが中心）などが食卓に並べられるのである。

このイブの日、ポーランドでは 200万人の失業者もいるし、年金で細々生活している独り暮らしのお年寄りもたくさんいる。1人っきりでクリスマスイブを過ごさせない様に、教会はクリスマスの会を開いて楽しい夜を過ごせるようにしているし、各家々でも、食卓には必ず1人分余分に皿とナイフ、フォーク、グラスを準備しておく。いつ誰が来てもいい様にということで、各家庭にもこの大切なクリスマスを1人で過ごさせないための習慣が定着しているのである。

4）人物によるポーランドの姿

多分、ほとんどの皆さんが知っているポーランド人を紹介してみよう。

① ピアノの詩人ショパン。

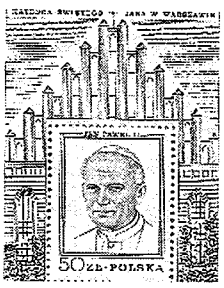
現在も5年に一度、世界のピアニストが集まってショパンコンクールがワルシャワで行われる。1965年には中村紘子さんが第4位に入賞し、1985年にはブーニンがグランプリ、1990年の前回のコンクールでは3位に横山幸雄さん、5位に高橋多佳子さんが入賞した。この高橋多佳子さん。日本人学校の音楽講師、下田先生の奥さんで、食事を共にし、楽しいひとときを過ごしたのを思い出す。

② 地動説をといたコペルニクス。

コペルニクス像ーワルシャワ市内

③ 放射能の研究で2つのノーベル賞（物理学賞と化学賞）に輝いた、マリー・キュリー。

④ エスペラント語を考えたザメンホフ。



ローマ法王

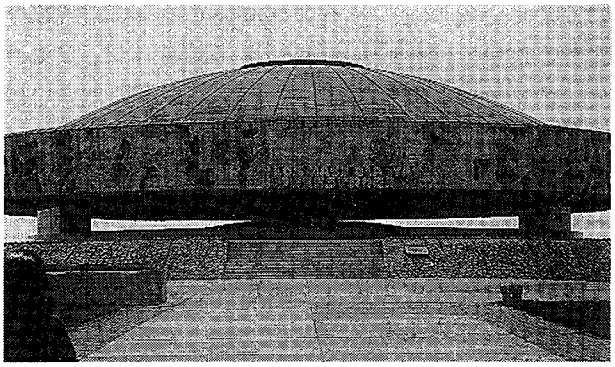
⑤ 現在のローマ法王、ヨハネパウロ2世。みんながパパ様と呼んでいる。

⑥ 連帯でポーランドを自由化に導き、ノーベル平和賞にも輝いたワレサ元大統領。

⑦ 元首相ヤルゼルスキー、最近『ポーランドを生きる』が出版された。

⑧ 29か国の400万人が虐殺された、アウシュビッツ（ポーランドではオシュフェンチェム）では、アンネ・フランクが思い起こされる。映画「シンドラーのリスト」によって生々しく映像化された。

ポーランドでは、各地にこのような収容所跡が残され、マイダネック収容所跡では、50万人が収



マイダネック収容所跡　死者の灰

容され、31万人が毒ガス「チクロンB」で殺された後が残されている。そこには巨大な石の彫刻『受難の門』があり、そこから収容所には『死の黒い道』が一直線に続いている。また、うずたかく積まれた死者の灰のそばには、『私たちの運命はあなたたちへの警告です。単なる話題ではありません。』という言葉が刻まれている。コルチャック先生やコルベ神父も思い出されることだろう。

2．ワルシャワ日本人学校の概要

ポーランド、ワルシャワ日本人学校は、市の中心部よりやや離れたモコトフ地区という閑静な環境の中にある。偶然にも3年間過ごした私の住居もこのモコトフ地区にあった。それも、学校まで歩いて1分。走って30秒ほどの近くにである。

校舎は民家であり、3階建の上に地下もあるという日本では考えられないほど広い民家であったが、学校の校舎としてはそれでも不自由に思われるところがたくさんあった。大変古い建物で、第2次大戦でワルシャワがドイツによって破壊された中で、辛うじて残ったものである。

(1)　名称

在ポーランド日本国大使館付属ワルシャワ日本人学校（SZKOLA JAPONSKA W WARSZAWIE）

(2)　設置者並びに沿革

ワルシャワには昭和50年前後、商社やメーカーの駐在員を中心に300人近い日本人がおり子女の教育に父母は心を砕いていた。そこで、大使館、商社、永住者等の有志の方々の努力によって「ワルシャワ日本人会」を発足し、昭和53年4月20日に開校された。校舎はワルシャワ75番小学校の1部を借用していたが、59年9月に現在の校舎に移転した。

(3)　学校設立の目的

日本国籍を有し、ポーランドに滞在する日本人学齢子女に対して、日本国憲法・教育基本法を始めとする教育諸法規に則り、文部省の学習指導要領に準拠して編成された教育課程に基づいた教育を受けさせるとともに、国際社会において、信頼と尊敬を受ける日本人としての基礎を養う。

（当時　月　180ドルの授業料を納めていた）

在ポーランド日本国大使閣下を迎えての入学式

(4)　日本人学校の学校経営の基本方針

①　自己教育力

児童・生徒の1人1人が、主体的に課題を見いだし、基礎的な知識・技能を身につけ、自ら学ぶ意欲「自己教育力」を育てる能力の育成。

②　国際理解教育

現地社会の歴史と伝統文化の理解を深め、また日本の歴史と文化を愛し、現地社会との交流を推進することにより、よりいっそう現地社会理解を深め、国際理解教育の充実を図る教育の推進。

③　信頼と協力

家庭と学校との連携を密にし、相互理解と信頼を深め、1人1人の児童・生徒の願いを生かす教育の推進。

(5)　日本人学校の教育の特色

①　ポーランドの現地の子女を聴講生として通学させている。

②　現地語であるポーランド語を週1時間全学年必修としている。

③　英会話も週1時間全学年必修としている。

④　小学校・中学校併設の学校である。

⑤　中学校はすべて単式授業であり、小学校も、極力複式授業を押さえ単式化して学力向上を図っている。（小学校も中学校も45分授業である。）

⑥　完全週休2日の形でカリキュラムを組んでいる。

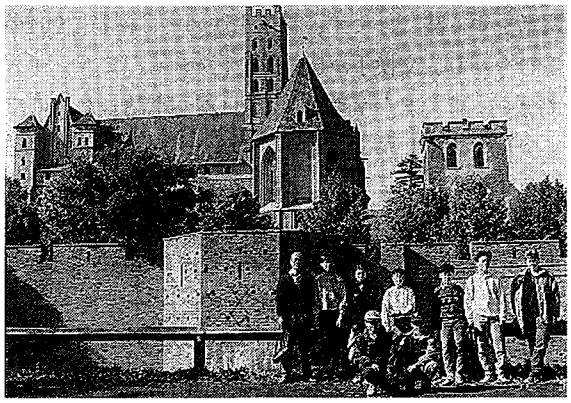
⑦　朝8時15分から30分までをワルシャワタイムとして位置付け、独自の教育をしている。

(6)　年間行事計画（平成5年度のもの）

特色のあるものだけ列挙しておく。

5月、12月…現地校との交歓会
6月…小学校1年生から中学3年まで一緒のキャンプ（1泊宿泊研修）
7月…現地の日本人会と合同運動会

9月…中学1年生から3年まで一緒の修学旅行



北ポーランド －マルボルク城にて－

11月…学習発表会（現地の劇場を借りて）
1月…水泳大会
2月…スケート大会

3．ワルシャワ日本人学校の児童・生徒の言語環境

1991年4月、ここワルシャワに赴任して驚いたことはいくつかあったが、生徒のものの考え方・実態に一番驚かされた。

私は、海外へ赴任するに当たって、何よりも海外にある日本人学校というその特殊性から、現地の（ここではポーランド、ワルシャワ市）と深く結びつき、また、ポーランドの人々とも深く交流しているものと思い込んでいた。そして、ワルシャワ日本人学校の中には、ハーフ（今後はダブルと呼びたい）の児童・生徒が多いので、このような児童・生徒の集団であれば、学校の中でもポーランド語が飛び交い、子供たちは日本人、ポーランド人という枠を越えて、気軽に声をかけあっていると思っていた。赴任早々、その予想の甘さを実感することになった。

ワルシャワでは、日本人の父親・ポーランド人の母親という取り合わせがほとんどである。赴任してから私も感じたのだけれども、何よりも美人の多い、美人の国ポーランドを象徴する事実といえそうである。全校生徒30名足らずのワルシャワ日本人学校のなかで、1年目には6組、2年目・3年目には4組の国際結婚の夫婦の子供がいたのである。

また、ワルシャワ日本人学校では聴講生制度があり、現在は4人（93年度には6人）の児童を受け入れている。聴講生は、両親ともポーランド人であり、ポーランド人の親日性を表す事実の1つといえそうである。

以下に、ポーランド生活とワルシャワ日本人学校の子供たちの実態を考えてみる。

1）子供たちの生活の中にポーランド社会との触れ合いが極端に少ない。

ワルシャワは165万人の生活するポーランドの首都であり、日本と比べれば治安が悪い。現に私の家も盗難にあったし、車を盗まれた教員もいた。しかし、西側諸国の首都と比較してみれば、西側諸国の方がずっと治安が悪く、凶悪な犯罪も多いのである。従って、子供たちの9割はタクシー通学であるが、このタクシー通学はもともとは、交通の便の悪さと人件費の安さから来たものであろうと思われる。

子供たちは学校の行きも帰りも自家用タクシーを使っている。タクシーの運転手には前もって親がいろいろな指示をしているから、子供自身は全く話す必要はない。子供たちは、ひと言ふた言の言葉を交わせば良い方で、1日の中で唯一自分の意志で現地の人を相手にポーランド語を話せるこの実践の場を逃すと、その日1日ポーランド語をひと言も話さなかったということになってしまう。

新赴任者用タクシーカードの1部

1．ドコント（どこへ）

プロシェン（～して下さい）
- イェハチ（行って）
- プシイェハチ（迎えに来て）

ド
- シコウィ（学校へ）
- ドム（家へ）
- スクレプ（店へ）
- バンク（銀行へ）
- アンバサディ（大使館へ）

2）問題を残す派遣教員の現地社会への適応の仕方

悲しいことに、生活が日本と急変し、お手伝いさんや運転手さんまで雇うような生活をするようになると、成金風をふかせ、あたかも自分が偉くなったかのように錯覚し、ポーランド人の大人を使用人として蔑視するような校長や教員までが現れる。

すると、当然、その子供がポーランドの人を軽蔑し、また、日本の生活をいつまでも忘れられず不適応を起こしたりもする。

ついには「私の子供にとってポーランドの日本人学校は良くない学校である。」と、職員の意見も聞く耳を持たず西側の中学校へ子供を送ってしまうような校長まで現れる。これでは、学校の教員がポーランド社会と交流を持つことなど不可能に近い状態

となっていくことになる。

そんな状態の中で、学校の教育目標に国際交流や現地理解を掲げてもむなしい気がする。

3）ポーランド語を話す必要性

私が赴任した91年の秋までは、西側並に自分の手に取って品物を買える店は、私の知るかぎり2軒しかなかった。1軒は24時間スーパー「ミッシェルバトレー」、もう1軒は土曜日・日曜日も開店している「ソビエスキー」というスーパーであった。しかし、両方とも小さな店でありまた品物の種類も豊富とは言えなかった。だから、平日には必要なものを買い物しておくのが主婦の大切な仕事であった。（1つの品物を求めて何軒かの店を回って、やっと目当ての品物を見つけた喜びは日本では想像できないものである。）

買ってきた水を整理

品物の少ないポーランドでは毎日の買い物は1日仕事であった。生活していくために、母親は大抵ポーランド語を話す必要に迫られ必死になって覚える。反面子供たちは自分で買い物をする機会もなく必要もないからポーランド語を話さなくなる。そして、それでも用は足りてしまうことになる。

その上、急激な速度で西側商品が入りだし、土曜日にも開店する店が増え、92年6月には「マクドナルド」が、93年8月には「ケンタッキーフライドチキン」が開店した。勿論、自分の手に取って品物を選べる店もあちこちに現れてきた。そのため、92年度に赴任した母親たちからは、ポーランド語を覚える必要も薄れてきたのである。まして、子供たちは言うまでもない。

バーコード社会と会話の必要性、そして、人と人のかかわりについてあらためて考えさせられた。

4）ポーランドへの偏見①…便利さになれた日本人

便利さになれすぎた日本人の一人として、私も妻もこの国を訪れていろいろな不便さを感ぜずにはいられなかった。

国際電話にはまいった。交換手を通じて日本へつないでもらうわけだが、まず、何度ダイヤルを回しても交換手につながらない。10回なら早い方である。やっと交換手が出たと思ったら片言のぎこちないポーランド語だと「忙しいのに何をしゃべってんの！」という感じで勝手に切られてしまう。だから、国際電話をする時にはまず、覚悟を決めて、901～904の番号を回し、交換手が出たら、「フシャービム　ザズボーニッチ　ド　ヤポーニ」（日本へ電話したいのですが）とまくしたて、日本の電話とポーランドの電話を「ゼロ　シェデム　オシェム　オシェム　ドゥヴァ　イエデン　チテリ　シェデム　ジビンチ　ゼロ」「チテリ　オシェム　チテリ　オシェム　ピエンチ　オシェム」と早口言葉のように次々に言わなくてはならなかった。これで運よく交換手に通じても、一度受話器を置いて交換からの電話を待つことになる。これから約8時間、つながる時もあり、つながらない時もあり、1日仕事であった。これも、1992年2月、ダイヤル自動化によりさよならすることができた。

こういった生活を体験すると、たいていの日本人は日本と比較して愚痴をこぼすようになる。そして、それがそのまま子供たちの考え（日本がポーランドより優れているという偏見）につながってしまうことが多い。

5）ポーランドへの偏見②…子供たちのポーランドの印象

学校で一年目に子供たちにポーランドの印象を聞くと、たいていは次の答の中に当てはまるし、プラス面の答はまず返ってこなかった。

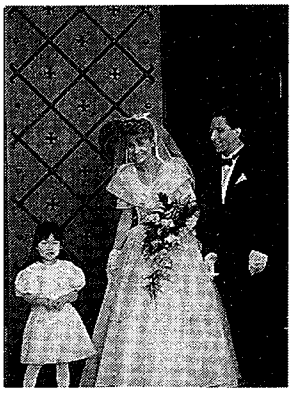
「不便なところ」「トイレなどが汚いところ」「貧しいところ」「物のないところ」「暗い感じのするところ」……などあらゆるマイナスイメージの言葉が口をついて飛び出してくる。児童・生徒自身が体験しているところは少ないのだから、親の考えが子供の口を借りて出ているに違いない。

6）ポーランドへの偏見③…ポーランドをまるごと受け入れることの難しさ

自分自身を振り返ってみても、なかなかその国の良いところを見つけられなかったような気がする。

運転手さんの家族とのひととき

1年がすぎ、2年目に入って、ポーランドの人とのつき合いが少し広がり、家庭に招待され始めてからイメージが変わったことが多いのであるから、仕方がないことかもしれない。



結婚式に招待されて

では、逆に、日本とはそんなにすばらしい国なのだろうか。日本人の心は本当に豊かであるといえるのだろうか。

物質的には豊かであり、便利な暮らしあることは間違いのないところであろう。だから、表面的に不便で物がないポーランドの暮らしは、日本人にとって耐えられない面もあるに違いない。だからといって、ポーランド人が心貧しいわけでもないし、その感覚で海外に暮らしても何のプラスもない。

私は、ポーランドで生きる限りは、生徒と共にポーランドとの様々な出会いを工夫したいと考えるようになった。ポーランドを受け入れるためには、子供たちがポーランドとどのように出会っていくのかが大変大きな問題であると考えたからである。

その出会いとは、『ポーランド語との出会い』であったり、『音楽との出会い』であったり、『人との出会い』であったり、『ポーランドという国との出会い』でもある。

そして、ここから私のワルシャワでの活動が出発することになるのであった。

ポーランド紹介1（ポーランドの結婚式と披露宴）

1993年8月14日（土曜日）

お手伝いに来てもらっているエバさんの息子、グジェゴシュさんとユリータさんの結婚式の日となりました。

夕方6時、教会に来てほしいということで、レストラン『バシタ』の近くの教会に行きました。

こちらの習慣で、教会での式が終わった後で花束を贈るのだということを聞いていましたので、奇数の花を買って持っていきました。ポーランドでは、偶数は縁起が悪いのだそうで、奇数の花を買っていくのです。私たちは5本の赤い薔薇を買っていきました。

カトリックの国、ポーランドでの結婚式。教会の入口近くで待つと、ぴかぴかのキャデラックに乗って、2人が登場しました。純白のウエディングドレスを着たユリータは本当に素敵です。

神父さんの声と、パイプオルガンの響く教会の中、本当に体中に音楽と声がしみ入ってくるような感じです。そして、パイプオルガンに合わせて歌うその声の美しさ、アベ・マリアに感激しました。

さて、神聖な第1部が終わると、第2部、日本でいう披露宴が始まります。場所を移して、みんなで花嫁・花婿を待ちます。入り口で、早速歓迎の音楽が始まり、シャンパンを抜いて、花嫁・花婿が飲みほし、そのグラスを後ろ向きに投げて、いよいよ第2部の開始です。グジェゴシュさんはユリータを抱き上げ中に入ります。

席に着くと、目の前にはごちそうがいっぱい。私たちも席に着きました。日本人は、私たち3人だけ。少し緊張しましたが、それも何分だったでしょうか。お年寄りも、若い者も、みんなでポーランドのウッカで乾杯です。小さいグラスですが、それを飲みほし、歌い踊り、心から楽しみます。

結婚式に備えて、私たち家族が覚えていった歌が一つありました。これは、いろんなお祝い、めでたい時にみんな歌うのですが『ストーラト、ストーラト、ニェフジョジョナン。ストーラト、ストーラト、ニェフジョジョナン。イエシチェラス、イエシチェラス、ニェフジョジョナン。ニェーフジョナーン。』という歌です。ストは100、ラトは歳ですから、「百才まで元気でいよう」というめでたい歌になるわけです。

そして、その後、花嫁・花婿は、みんなが『ゴシチ、ゴシチ』と、大声で叫んでいる間は、口づけを離してはならないのです。さすがに照れもあって、花嫁のユリータが、ベールで隠しながらキスしている姿が、また、何とも言えず幸せな気分にしてくれました。

さあ、少しおなかに入ると、早速ダンスタイムが始まりました。私の娘木綿香は、この時間に入るまでは「帰りたい、帰りたい。」といっていたのに、急に目覚めて1人でダンスをしている方へいってしまいました。4才ですし、親の私たちもダンスなど余り知りませんから、相手がいなくてぽつんとしていると、アンジェイくんという小学生が優しく相手をしてくれました。さあ、これからが大変。この後まだまだ会場は盛り上がり、夜中1時に私たちが帰るまで、このお嬢さんは踊り続けることになるのです。（足の親指に水ぶくれができるほど、踊りまくったわけです。）

結局、このパーティは、翌日の朝7時まで続いたようです。

日本の女性を、1人で寂しくさせていては申し訳ないと、張り切るたくさんのポーランドの男性から誘われて、妻も娘よりは少ないけれど、ずいぶん踊ったのでした。

どの国でも、人間が幸せな時の顔はとてもいいものです。

Ⅱ．在外教育施設での実践活動

1．交歓会の場を借りて…スピーチ（実践活動１）

1）はじめに

いかにしたらポーランド語を覚える必要感や場が生み出せるのか。

悩みながら、あっという間に１年目の夏は過ぎ、２学期を迎えた。さて、平成３年度の第２回（12月実施）の現地校との交流の時期となった。今年から205番小学校以外に330番小学校（両方ともポーランドの現地校である）との交流会も持つことになった。担当は私である。ちょうどクリスマスの時期であり、現地のクリスマス行事を共に過ごそうというものであった。

205番小学校との交歓会の様子

205番小学校との第１回交流に私はあまり魅力を感じなかった。それは、子供たちの積極的な活動があまりにも少ないからであった。今回は、最初に330番小学校に招待されていくのだが、初めて交流をする学校でもあり、また、330番小学校では英語教育もかなり熱心であると聞いたので、次のように生徒１人１人による英語とポーランド語のスピーチ場面を設定して、実際に言葉を話す必要感を持たせ、学習していく場面を作ろうと考えた。

そして、この時こそダブルの文化をもっている子供たちを活躍させる時であると考えた。

㈱　ダブルの文化については、次の帰国後のスピーチを参考にしていただきたい。

「ダブルと呼びたい」　帰国後のスピーチから

ポーランドワルシャワ日本人学校の中には、毎年４人から６人ぐらいのポーランドのお母さん、日本人のお父さんを持つ子供たちがいます。あなたたちは、こういう子たちを何と呼んでいますか？今年の夏までは、私はこういう子供たちを「ハーフ」と呼ぶのにまったく抵抗はなかったのですが……。

先日（もう１年以上前になりますが）、私は電話でワルシャワ大学の岡崎先生（ワルシャワ在住25年以上）と話をしてから、疑問を持つようになりました。

この岡崎先生はポーランド人の奥さんと２人のお子さんをお持ちです。ですから、子供は、アンナ・東子・岡崎というように２つの国の名前を持っているわけです。

その先生との電話で、私が「日本人学校の中で、「ハーフ」の子供たちがいきいきと活躍できるような学校にしたいと思っています。」と話した時に、岡崎先生は「私は、「ハーフ」（半分）でなく、「ダブル」といっています。つまり、子供たちは、日本という国や文化とポーランドという国や文化の両面を重ねて持っている、持つことのできる子供たちだと考えています。そういう点では、ほかの子供たちの倍の背景を持つと考えています。ただ、親としては、自分たちは日本人として、また、ポーランド人として生きてきたから、ダブルとして生きる子供たちの気持ちや体験にどう対応していいのかは難しいところがありますが……。」とおっしゃっていました。

この話を聞いた時、私は言葉の重さを感じ、そのような気持ちを考えもしなかった自分が情けなくなり、胸が痛みました。そして、日本人学校に来ている塚本クレオさんという子供を思い浮かべました。彼女は、日本では「外人！外人！」といじめられ、ポーランドでは言葉が自由にしゃべれないためにつらい思いをしたそうです。あなたたちは、この「ハーフとダブル」という言葉、どう考えますか。

日本人学校の中には、毎年４～６人程度のダブルの文化をもつ子供たちが在籍している。しかし、ポーランドに対する偏見・蔑視から、ポーランドという国と積極的に交流を持っていくことや、ポーランド語を話すということに対して児童・生徒たちに価値を感じさせるような場を、日本人学校の教育の中でなかなか作っていくことができにくかった。

今こそ、このダブルの文化をもつ子供たちが２つの国のかけ橋として活躍し認められる時だし、他の子供たちもポーランド語との出会いを感じさせる時ではないかと考えた。

2）330番小学校との交歓会実施要項

330番小学校との交歓会について（案）

平成３年11月22日

1．目的

ポーランドの現地校に行って学校生活を実際に見学し、また、ポーランドの子供たちと日本の子供たちが遊びを通してふれ合うことによって、日

本人としての誇りや自覚を持ち心と心の交流を図り、国際親善に寄与する。

2．相手校　330番小学校

3．日　時　平成3年12月18日（水）

4．当日の流れ

13:30　通訳……ベロニカ先生、生方先生

○330番小学校校長の挨拶

○生徒会活動の代表者の話

（委員会、購買、スポーツクラブ、アメリカンスクール）

13:45○ポーランドのクリスマスの過ごし方

14:10○ポーランドの伝統的な劇と民族舞踊

14:30●ワルシャワ日本人学校から

①日本のクリスマスの過ごし方をスピーチする

②日本の年末や新年の過ごし方をスピーチする

14:40○学校見学

15:00

《児童・生徒》

●ダンスによる交流会（自由にのびのびと）

《教員》

○日本とポーランドの教育を語る

15:25●お礼の言葉

ポーランド語……低学年で

ポーランドの学校からのプログラム

PROGRAM SPOTKANIA W DNIU 18.XII.1991 godz.13^{30}-16^{00}

Lp	Pozycje programu	czas trwania
1.	Wystąpienie Dyrektora Szkoły Podstawowej Nr 330 校長先生のはじめのご挨拶	5 minut
2.	Wystąpienie uczniów いろいろな活動する生徒の話し:	
	-przedstawiciela Samorządu Szkolnego 委員会の代表者	
	-przedstawiciela Spółdzielni Uczniowskiej	
	-przedstawiciela kół sportowych スポーツクラブの代表者	
	-przedstawiciela Szkoły Języka Angloamerykańskiego American School の代表者	10 minut
3.	Wystąpienie przedstawicieli Samorządu Szkolnego ポーランドのクリスマスの過し方についての話し	
	-polskie tradycje świąteczne i noworoczne	25 minut
4.	Występ Zespołu Jaromiry	
	-inscenizacje 伝統的な習慣の劇	
	-polskie tańce ludowe ポーランドの民族舞踊	20 minut
5.	Wystąpienie Szkoły Japońskiej ワルシャワ日本人学校から	10 minut
6.	Zwiedzanie szkoły 学校見学	20 minut
7.	Dyskoteka dla uczniów 児童・生徒のダンス / Spotkanie nauczycieli 教員は教育を語る	1 godzina
	Razem:	2 godz 30 min.

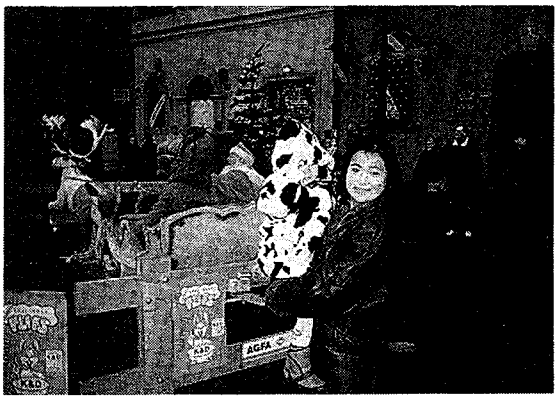
（翻訳・文字　ベロニカ先生）

3）現地職員からのスピーチ

ポーランドのクリスマス

ベロニカ・リフォフスカ

12月に入ったらいよいよクリスマスの雰囲気を感じるようになります。お店はきれいに飾られ、家の大掃除をしたり、買い物をして皆が忙しくなります。やっと24日になると、家はぴかぴか。クリスマスツリー（生のもみの木）の飾りはキラキラして、台所からケーキの匂いが広がったりしておごそかな祭りの気持ちになります。



ポーランド旧市街のクリスマス

ポーランドのクリスマスは24日の夜から始まります。家族が集まって、空に初めての星が出た時に食事を始めます。古い伝統によると料理は12種類あります。地方に寄って料理が違いますが、赤カブのスープ（バルシチ）とピエロギ（酸っぱいキャベツときのこが入った餃子みたいなもの）を必ず食べます。

ヨーロッパの国では七面鳥を食べる習慣がありますが、ポーランド人は24日には肉を食べません。その代わりに鯉や鰊などを色々に料理して食べます。料理の数が多いので、ケーキを食べる前にちょっと休憩をしてプレゼントをもらいます。（子供だけでなく大人ももらいます。）

クリスマスは家族の大事な行事なので１人でさみしい人がいないように１人分の食器を余分に用意します。

食事が終わってプレゼントを見て、皆楽しい気持ちで真夜中の12時に教会へ行きます。お祈りをしたり、大きな声でクリスマスソングを歌ったりして、キリストの誕生日を祝います。

25日は親戚を訪ねたり散歩をしたりしてゆっくり過ごします。

ヴェ ソ ウィ フ　　シュ フィエント（メリークリスマス）

Wesołych Świąt！

4）スピーチの実例

日本人学校の児童・生徒、教員がしておくべき事前準備として下記のスピーチを提案した。

1．児童のスピーチ（ポーランド語で）
…小学生3年～6年

●中学年、高学年の児童は、せめて1人1文程度ポーランド語で挨拶をしたい。

〈日本のクリスマス〉

① こんにちは、今日はご招待頂きありがとう。
② 私たちは、ワルシャワ日本人学校の1年～中学3年生です。
③ 日本のクリスマスについて、簡単にお話します。
④ 日本ではクリスマスイブが楽しみです。
⑤ その日にはおいしいケーキが食べられるからです。
⑥ また、夜にはサンタクロースがやって来ます。
⑦ 願い事をしておくと、かなえてもらえるのです。
⑧ 今、日本の男の子たちは、ゲームの機械やソフトをお願いします。
⑨ 女の子たちは、お人形や、ぬいぐるみなどをお願いします。
⑩ 次の日、目が覚めてみると、プレゼントが置いてあります。
⑪ 枕元とか、大きな靴下の中とかにあります。
⑫ 町には大きなクリスマスツリーが飾られます、
⑬ ジングルベルや赤鼻のトナカイなどの曲が流れます。
⑭ 宗教と関係なく、楽しむ日といえるようです。

2．中学生のスピーチ（英語でのスピーチ）の1部

① 今日は、私たちは、私たちは、日本のとても大きな行事である、大晦日と正月について話します。（省略）
⑤ そして、神社に初詣をします。神様に「今年1年健康でありますように」とか、みんなの願いがかなうようにお願いをするのです。また、この日には、「年賀状」といって普段会ったりできない遠くの友達などからも便りが届きます。（省略）

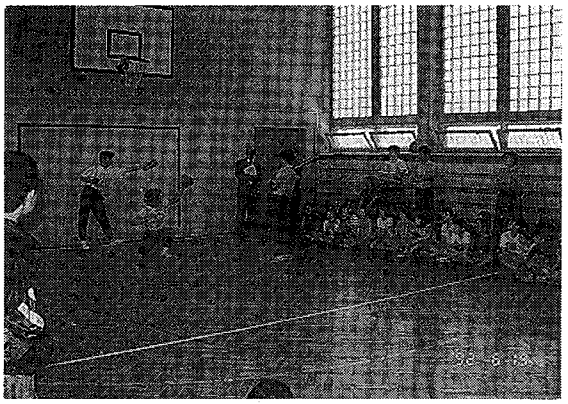
5）205番小学校とのスポーツ交歓会スピーチ

205 番小学校との交歓会について
平成4年6月12日

1．校長の話
2．生徒の紹介文
（司会…高橋ミチ）

205番小学校

① こんにちは、交歓会にご招待いただきありがとうございます。
② 私たち日本人学校の生徒は、現在32名です。
③ しかし、校庭が狭いので、のびのび遊べないのが悩みです。
④ 今日は、日本の子供たちが良くするスポーツと、日本独特のスポーツを紹介します。
⑤ 日本人学校の中学生が、見本を見せますので楽しんで下さい。
⑥ まず、1番目は、日本の子供たちに人気のある野球です。
⑦ 日本のほとんどの中学校には、野球部があります。
⑧ 子供たちは、放課後、部活動や、少年野球チームに入って活動しています。
⑨ 高校生になると、全国から選ばれたチームが甲子園という球場に集まって優勝を競います。


スポーツ交歓会風景

⑩ 道具として、バット・ボール・グローブ・キャッチャーミットなどを使います。
⑪ では、3人の中学生、平山・佐々木・原君にキャッチボールをしてもらいます。
⑫ ピッチャーの投げ方として、オーバースローサイドスロー、アンダースローなどがあります。
⑬ 次はサッカーです。サッカーはポーランドでも、この小学校でも人気のあるスポーツでしょう。
⑭ 今、日本人学校の中に、ポーランドの子供達と一緒にグバルディアで練習している生徒がいます。

⑮　矢沢君と樋口君に出てもらって、見本を見せます。
①　205番小学校の中で自信のある人は一緒にやって下さい。
②　また、日本の小学校、中学校で必ず行われるスポーツとして、バレーボール・バスケットボール・マット運動・鉄棒・マラソン・幅跳び・高飛びなどがあります。
③　次に日本独特のスポーツをあげてみますと、相撲・剣道・柔道・空手・合気道などがあります。
④　今日は、その中で、相撲と合気道を少しだけ紹介します。
⑤　相撲は、日本の国のスポーツであり、歴史のあるものです。
⑥　かけ声として、「はっけよい」、「のこった」などといいます。
⑦　では、平山・佐々木・原君にしてもらいます。（ここで３人がマットの上にあがって相撲をする。）
⑧　次は合気道です。これは、空手と違って人間の関節を利用して自分の身を守る技です。
⑨　では、佐々木・原君にしてもらいます。（ここでマットの上にあがって合気道をする。）
⑩　これで紹介を終わります。
⑪　この交歓会の終わりに、時間があれば、みんなで縄跳びをしたいと思います。何人跳べるか競争しましょう。

６）児童・生徒の感想

５年　福井　洋介

５・６時間目に205番小学校に交歓会に出かけました。体育館に入ると、もう、ポーランドの人たちが待っていました。校長先生の挨拶が終わり、僕たちが言う番になりました。僕の挨拶は、「ウチニョヴィエ　ウスメイクラスィ　ヴィストンピョン　テラスプシェ　ドバミ　バフチェシェン　ドブジェ」です。これは、「日本の中学生がこれから見本を見せますので楽しんで下さい。」という意味です。あいさつやスポーツをやって、僕が１番楽しみにしていた合気道です。大喜君、佐々木君、坂元君、荻野君でやってくれました。ものすごく、バタン、バタンとやっていました。「すごい、ぼくもできたらいいなあ」と思いました。今日の交歓会は結構おもしろかったです。

６年　樋口　星太郎

初めての交歓会でしたが、結構楽しかったです。ポーランド語でのあいさつも大きな声で言うことができました。「フカジュディ　プラディ　シコレ　ヴ　ヤポニ　イスティニェ　シックツヤ　ベースボール（日本のほとんどの中学校には野球部があります。）」と言ったのですが、イスティニェと言う発音が難しかったです。

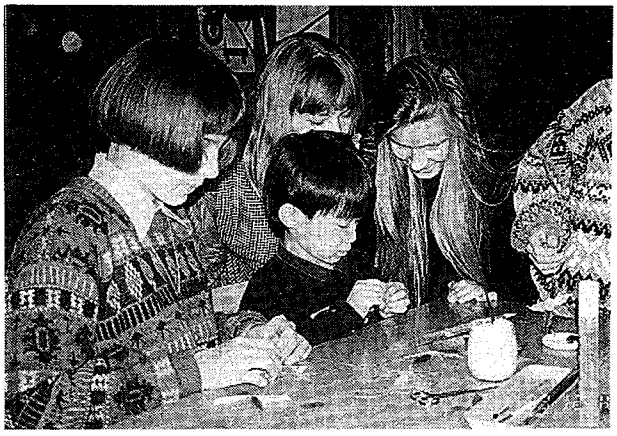
７）考察と反省

ポーランド語を暗記して話すという実践は、ポーランドの330番小学校の教員・生徒から、誠に大きな拍手とほめ言葉をもらった。

そして、この交歓会をきっかけにして、92年度の２つの交歓会（「スポーツ交流」「日本食にふれよう」）でも、日本人学校の交歓会にはポーランド語での１人ひと言スピーチが欠かせないものとなり、定着しつつある。それは、何度かスピーチ体験を重ねた児童の感想には、現地の言葉で話すということについての心の深まりが感じられるからである。

６年　横田　光治

スピーチの入った交歓会は３回経験した。１回目は330番小学校のクリスマス会、２回目は205番小学校のスポーツ会、３回目は330番小学校との日本食会でした。スピーチは一石二鳥である。まず、ポーランド人との交流を深め、また、自分でもポーランド語を覚えられるからである。中にはあまり覚えていない人もいるようだが、そのような人は、もっと頑張ってほしい。（中略）我々がポーランド語を覚え、１人１人がスピーチをすると、自分も参加しているんだなということを感じるし、相手にとっても自分の国の言葉で話してくれれば、嬉しく感じていると思う。



330番小学校とのクリスマス会

6年　樋口　星太郎

330番小学校との交歓会は、ポーランド語で話したので、「どうでした（ノ　イツォ）」「そして（イ）」という会話らしい言葉も覚えたので良かったと思う。普段はバスなどに乗って、ポーランドの人と話す機会はあるんだけれども、英語を使っても話せるのでポーランド語はめったに話さない。ポーランド語で話して相手に伝えることによって、今、自分は交歓会をしているんだなあと思うし、少し緊張感も出てくるので、おたがいに相手の国の言葉を話そうと努力していくことが大切だなあと思った。

日本人学校では、9学年ともポーランド語を週1時間学習している。しかし、今まではポーランド語を話さなければならないという必要感と場を、学校教育の中でなかなか作れないでいた。また、ポーランドと日本のダブルの文化をもちながら、ポーランドへの日本人の偏見から学校でも個性を発揮できなかった子供たち（一般的にはハーフと呼ばれている）も活躍する場が生まれてきた。2つの文化のかけ橋としての大きな役割である。

思いきって実践してみれば、感想にもあるように生徒はそれなりの緊張感と充実感を持つ。そして、少なくとも自分の担当した部分のポーランド語は、当分心の中に残り、忘れないだろう。

また、日本人学校の児童・生徒の中で、1番早くあいさつを覚えたのは低学年だった。恥ずかしさもなく、偏見もまだ凝り固まっていない子供たちであるからこそであろう。最低1人ひと言話す。それによって、その場に自己の存在感を感じ、異文化の中で言葉が通じる喜びや楽しさも感じてほしかった。

そして、何人かの生徒たちは手ごたえを感じてくれたに違いないと私は確信している。

数回の実践で生徒の意識が根底から変えられるはずもなく、また、この活動ただ1つで生徒が変わっていくはずもない。しかし、何もしていかないよりは、積極的に、そして、計画的に生徒を教師は育てていかなければならない。そして、何よりも、今自分はポーランドで生活しているのだという実感を持ってほしい。

また、この実践も何回か繰り返していけばマンネリ化をまぬがれることはできない。しかし、ワルシャワ日本人学校は小規模校である。その特質を良い方にいかせば、1人1人の教員の発想を生かし、それを全教員で大きくふくらましていくことは可能である。そのためには、全員が1つとなって活動していくことが必要であり、また、1人1人のアイデアを受け入れ実現していく努力が必要となってくる。

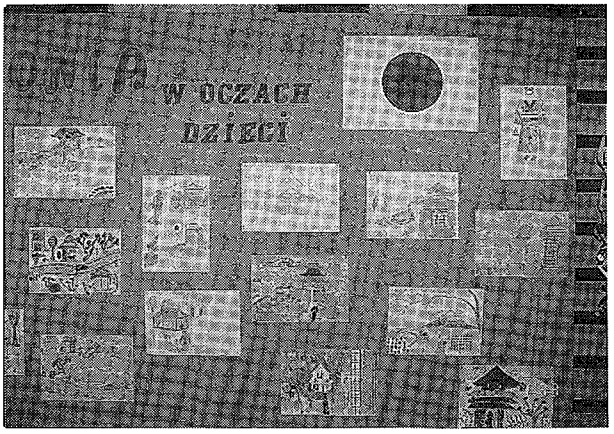
海外日本人学校では現地採用の先生がいないと誠に情けない状況となる。電話1本、満足な応答もできないのである。この実践でも翻訳はすべて、ベロニカ先生の手によるものであり、91年の9月末からウルシュラ先生に代わって勤めたので、初めの大仕事となった。

8）これからの交歓会への提案

1．生徒自身が計画し実行する雰囲気を作り、自分たちの手で作る交歓会にする。
　1）事前にアンケートをとって、日本についてどんな印象を持っているかを知る。
　2）日本人学校の教師や生徒がもっとポーランド語で紹介する。
　3）計画的に実践する。
　4）授業の中で教科学習に組み合わせることができるものがあれば実践していく。

2．具体的な案をたくさん持つこと。
　1）内容

〈例1〉・日本紹介
- 日本国土の地球的な位置、気候や地理について
- 日本の歴史
- 日本の名所
- 私たちの日本ベスト10
- 日本のお札と人物
- 日本が世界に誇る人（男性編・女性編）
- 今年（昨年）の日本のニュースビッグ10
- 日本の昔話
- 人気アニメキャラクターベスト10
- 人気歌手、俳優、紹介
- 日本のあいさつ言葉とポーランドのあいさつ言葉
- 日本のタ食ベスト10など



ポーランドの子供たちの考える日本の姿
（富士山、着物（なぜか 中国風）、桜、ビル…）

〈例2〉書道・茶道・剣道などの日本古来からの伝統を生かした交歓会。
書道…筆を持って自分で書く。
茶道…中学生、高学年を中心に日本的なムード作りをして、実際に抹茶を立ててふるまう。
〈例3〉日本の古き遊びを生かした交歓会。
・けん玉　・こま　・紙風船　・将棋　・お手玉
・おはじき　・ビー玉　・めんこ　・すごろく
・福笑い　・相撲　・鬼ごっこなど
〈例4〉日本の現代の遊びを生かした交歓会。
ファミコン　・ゲームボーイ　・スーパーファミコン　・レゴ　・ミニロボット
〈例5〉スポーツを生かした交歓会。
・リンゴ　・ドッジボール　・野球　・サッカー
・ビーチバレーボール　バスケット
・ミニテニス　・縄跳び

ポーランド紹介2

アンジェイキ（占いの日）

占いの日　りんごを使った占い

11月30日はポーランドの占いの日です。93年12月1日にはワルシャワ日本人学校も近くの205番小学校から招待を受け、占いを共にすることになりました。205番小学校の体育館の中で5つの占いを紹介してもらいました。

順番に紹介してみましょう。

1番目。りんごを使った占い。

まず、手に1個のりんごを取ります。日本と同じ様にナイフで皮をむいていきます。(面白いのは、ポーランドでも長く皮をむける人はよい奥さんになるというのだそうです。) 皮が切れたところで、むいた皮を手にもって頭上後方へ投げます。その落ちた皮の形がアルファベットの何と言う字に似ているかで占います。そこに好きな人の頭文字が出ていれば良いのですが……。

2番目。誰が1番早く結婚できるか。

男女に別れて、履いている靴の片方を脱ぎます。その靴が離れない様に立てに並べ、入り口に向かって並べていきます。1番初めにその靴が入り口に届いた人が早く結婚する人となるわけです。

3番目。カップの下は？

10個ぐらいのカップのしたにいろいろなものが入っています。その中からひとつを選ぶわけです。

① 十字架…神父さんか尼さんになる。一生結婚はできない。
② 塩…あなたには困難な生活が待っています。
③ 砂糖…甘い生活がやって来ます。
④ コイン…お金持ちになります。
⑤ 指輪…すぐに結婚するでしょう。
⑥ 布…毎日泣いている生活になるでしょう。

占いの日　カップの下は？

4番目。ろうそくを使った占い。

鍵を使います。ポーランドでは鍵は秘密の扉を開けるもの。また、昔から金属は不思議な力を持ち、鬼とか悪いものを追い払う力を持つと考えられてきました。そのうえ形が十字架とも似ていますよね。

この鍵の穴からろうを流し込みます。すると下で受けている水を張ったボールの中でろうが不思議な形に固まってきます。これを影絵にしていろいろなイメージで似ているものを想像するのです。

5番目。指輪を使ったもの。

結婚指輪を借りて、糸でつるしカップの中に入れます。しばらくすると指輪は揺れ出してきてカップの縁と当たって音を出します。この音のした数だけ年を待つと結婚できるということです。

ろうそくを使った占い

2．ワルシャワタイムで子供を変える
（実践活動２）

1）はじめに

赴任して１年が過ぎようとした平成３年度の終わりから、来年度の日本人学校のあり方について真剣に考えるようになった。私自身も、ワルシャワ日本人学校の児童・生徒にもっと期待する面が多かったし、小規模校としてもっと職員の発想を生かし、ワルシャワにある日本人学校という特色を出し、保護者にも職員が自信を持って誇れる学校作りがしたかったからである。

また、我々派遣教員は３年期限であるため、平成４年度には学校長を含めて３名が新しくなる。（派遣教員が６名中３名が変わることになる）後に残った３人の派遣教員を中心に来年度の学校すべての体制を整えておかねばならない。何度も話し合い、我々派遣教員が子供たちにもつ、「こうあってほしい」という願いのかなうような、小規模校ならではの学校作りのためのアイデアを出しあった。

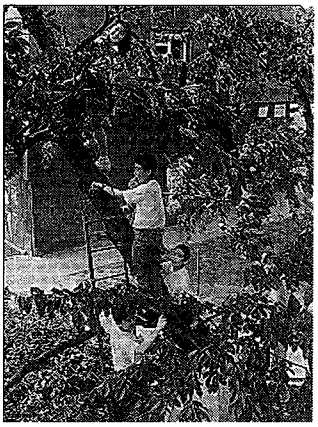
日本と違って、この小規模校ワルシャワ日本人学校なら、我々の夢を来年度は実行できるのではないかという期待が大きくふくらんだ。

話し合いの結果、３つの案が生まれようとしていた。１つは、私の担当するこのワルシャワタイム、２つ目は全校スポーツタイム、３つ目が全校文化タイムであった。

2）ワルシャワタイムへの発想

私がなぜこのワルシャワタイムを発想し、実現しようとしたかについては、次の生徒の実態と私の願いがあったからである。（児童・生徒の実態については、別項で述べたがこのワルシャワタイムの目標とに関わるものを述べておく。）

① 私がこの学校に赴任した時、形だけは児童・生徒会活動があった。小学校高学年と中学部を合わせても10数名しかいないのだから、決まり切った月１回の活動では、徐々に形骸化していって、児童・生徒の個性を生かした活動になるはずもなかった。



さくらんぼとり

従って、小学１年生から中学３年生の子供たちのつながりは、遊びを中心にしたものであり、学校の中で学習を通じた仲間意識、向上意欲は生まれにくい状態であった。

小学生も中学生もお互いに遊び仲間ではあるけれども、中学生が学校活動や小学生を指導し、リーダーシップを取るなんてことはほとんどない１年間であった。

また、中学部７、８名と小学部20名程度の小規模校でありながら、１週間に１度、火曜日の教師主導による朝会しか全校が集まって活動する時間が設定されていないので、全校生徒が１つになって活動しているという実感はなかった。

私は中学年の担任だったが、授業は精一杯持っているために、他学年の生徒の顔をほとんど見ないで終わってしまう日が何日もあった。この狭い校舎の、少人数の学校の中でである。

教師も全体を把握しにくいし、１人１人がそれぞれの持ち場で頑張ってはいるが、学校全体でいつも活動しているのだという自覚が、職員にも生徒にもなく、このままでは、受け身の生徒を増やしていくだけではないかと不安になってきた。

② 学力的にはあまり問題もないのだが、それぞれが小さな殻の中に閉じこもり、（１日の学校生活の中で、授業はいつも１人から３人ぐらいで受けていることが多いのだから、当然といえば当然）人前で発表や活動することを極端に恥ずかしがる傾向にある。

手間はかかるだろうが、教師が十分に事前指導をして、児童・生徒に発表すべき内容を持たせ、発表活動をしてよかったという満足感を与えてやらなければならない。それが１人１人の自信につながっていくはずである。

③ この学校には余り規則がない、もちろん生徒手帳もないし、それに明記される規律もない。従って、自由でのびのびしているが、悪く言えば、その場その場で適当に動いているともいえる。集団で動くということが苦手だし、規律に鈍感であるということになる。

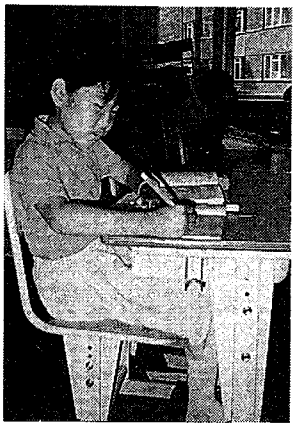
また、特に中学生の精神年齢が幼児化してしまい、学校のリーダーとしての自覚がない。それは、中学３年生が小学校１・２年生と鬼ごっこを楽しげにしている様や、雪合戦で小学生相手にむきになって雪をぶつけている姿を見れば良く分かる。そのために、集団のまとめ方、集まり方等、基礎・

基本となる力が欠ける傾向にある。

やはりこういう学校では、中学生が先頭にたって学校の活動を実践している姿（司会、挨拶、発表など）を見ることが、小学生を刺激し、まとまった１つの集団へと育てていく力になるに違いない。

④　この学校の児童生徒は、極端に発表力にかける点が見られた。それは、各学年での授業の中で、話し合いや意見交換ができない人数の学級がほとんどであり、中学生にいたっては各学年１名というのが現状である。

この子供たちに教室の授業以外に人前で発表する機会を増やしていかなければ「話す・聞く」というこれからの社会の中で最も大切な言語活動の場が、非常に少ないまま終わってしまう。



中学年教室の風景

また、私は１年目に中学年の担任であったが、学校全体での定期的な活動がないために教員自体も他学年の生徒の話を聞く場もないし、ふれあいも少ないのであった。

小規模校だからこそ、毎日、全校生徒が一堂に会し、おたがいの存在を確かめ、中学生のリードによって他学年の学習の内容を聞き、話し方、聞き方、挨拶の仕方、など見習っていくことができるのである。

以上の実態と教師のねがいから、ワルシャワタイムを特設し、下にあげた４つの力を育てようと考えたのである。

① 児童・生徒の自主性・リーダー性を養う。
② 全体の場で発表活動をすることによって、児童・生徒に自信を持たせ、自立心を養う。
③ 集団活動の中での規律を身につけさせる。
④ 教科での学習活動の発表の場として活用し、児童・生徒に「話す・聞く」力を育てる

３）ワルシャワタイム実施計画

以上のように生徒の実態から目標を設定して、ワルシャワタイムと銘打った毎日の継続的な活動によって生徒自身の成長を図ろうと思ったのである。

ワルシャワタイム計画（案）　平成４年４月

１．目標
　① 児童・生徒の自主性・リーダー性を養う
　② 全体の場で発表活動をすることによって、児童・生徒に自信を持たせ、自立心を養う。
　③ 集団活動の中での規律を身につけさせる。
　④ 教科での学習活動の発表の場として活用し、児童・生徒の「話す・聞く」力を育てる。

２．時間
　・月曜日～金曜日　朝８：30～８：45

３．場所……講堂

４．並び方・朝礼の並び方

５．基本的な時間構成
　・曜日変更はしないで、決められた曜日を自分たちの学年の時間と自覚させていく。
　・司会は、１学期は中学３年生。２学期以降は中学２年生と１年生が引き継いでいく。

ワルシャワタイムの雰囲気

６．生徒の動き

８：25……登校、荷物を学年ロッカーにおいて講堂に集合。司会者の指示にしたがって、中学生が全体を整列させる。

司会者は１番前で、全体を指導する。（横に教員が寄り添って指導していく）

～８：30

チャイムとともに、教員は全員講堂に集合（教員は、今日の出欠を確認する）

司会者は教員がそろったら、全員に号令をかける。

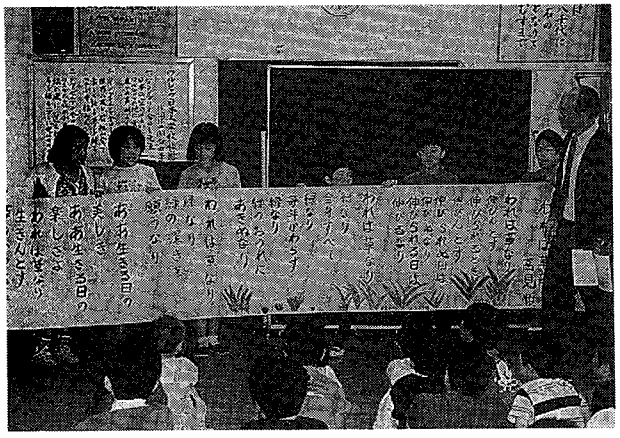
月曜日……学校朝礼……校歌・校長の話
　・今週の予定・行事について　校長、西田
火曜日……中学生タイム……寺本、
水曜日……低学年タイム……平野、増岡
木曜日……中学年タイム……杉浦、吉田

金曜日……高学生タイム……吉田、寺本

（司会と流れの例）

◇　さわやかに、朝のあいさつをしましょう。
「おはようございます」
◇　これから、……を始めます。
◇　昨日の○○さんの詩の朗読で、私は空の中に吸い込まれていくような気がしました。
・今日はひとつだけ、こんなことに気をつけて聞きましょう。
～8：33
では、静かに座って下さい。
今日は、○○年の発表です。

読み方の工夫	音読のポイント
1．1人読み	1．しっかりした声で読む
2．みんなで読む …避けたい	
3．分担読み …呼びかけを連想して	2．正しい発音で読む
4．輪唱…教材発掘	3．ゆっくりしたテンポで読む
5．体を使って 6．楽器を利用して	
7．群読 …台本が必要	4．リズムのある読み方ができる



ワルシャワタイムの発表風景　5年生

～8：43
◇　ありがとうございました。
私は、今日の詩を聞きながら、こんなことを感じました。皆さんはどうでしたか？
◇　明日は、低学年のワルシャワタイムです。期待しています。
◇　これで、今日のワルシャワタイムを終わります。
8：45
◇　起立、礼、まわれ右
（中学生から退場）

4）児童・生徒の感想と教師の感想
（平成4年度　学校便り5月号より）

朝8時20分、「キーンコンカーンコン」というチャイムの音が鳴り響きますと、子供たちは講堂に集まります。8時30分、ワルシャワタイムの始まりです。

ワルシャワタイムというのは、日本人学校の子供たちに少しでも発表力をつけたいという意図で始めたものです。司会は中学3年生。各学年の子供たちが順番に発表していきます。最初のうちは国語を中心として、作文や詩の朗読をしています。慣れてきたら、自分の意見や感想を発表できるようになればいいなと思っています。

今までに、各学年とも2回ほど発表しました。どの子も、回を重ねるごとに良くなってきています。また、集団で素早く静かに行動することもできるようになってきました。発表するときの子供たちの真剣な目。それを見守る温かい眼差し。そういうものをこれからも大切にしていきたいと思っています。

6年生　樋口　星太郎

ワルシャワタイムは、自分の考えや、自分の勉強したことを他学年に発表できるとてもいい時間だと思う。6年生は3人で協力した発表ができたし、少人数なのに良く頑張ったと思う。他学年の発表を聞いていると、今こんな勉強をしているのかと分かって、特に面白い。5年生の「休み時間に何をしますか。」というインタビューは楽しかった。

ワルシャワタイムの発表風景　6年

6年生　横田　光治

今年は去年にはなかったワルシャワタイムがあった。この企画は人前で話ができるように、話すこと

になれ、また、人の話が良く聞けるようになるというねらいでできたそうです。他学年の発表はとても面白くて、特に上級生の作文の発表などはとても勉強になって、お手本にできたので良かったと思う。また、自分たちで発表するのは回を重ねるごとに慣れてきて今では、もっとやったほうがいいなと思う。下級生の発表も、前にこんなことも勉強したなあと思い出しながら聞けたので楽しかった。

去年と違って、毎日講堂に集まるので、休んだ人がすぐ分かるし、おたがいのコミュニケーションの場があるので、他学年とも去年よりも仲良くなれたと思う。このワルシャワタイムのおかげで人前で話ができるようになったので、これからもこの学校で続けてほしい。

（平成４年度　学校便り６月号より）

月曜日のワルシャワタイムは、校歌・校長先生のお話・今週の予定というのがひとつの流れになっています。その校歌ですが、最初は無伴奏でした。「伴奏もあるといいね。」と呼びかけてみると、中学３年生の平山君が「メロディーだけでもいいんだったら、やってもてもいいですよ。」という嬉しい申し出をしてくれました。そして、初めて生徒による伴奏付きの校歌が始まりました。それまでの校歌よりみんなの声が大きかったのをはっきり覚えています。

それから中学２年生の樋口さん、中学１年生の矢沢さん、高橋さんによるピアノ伴奏、そして中学全員による合奏へと広がっていきました。その間約２か月かかりましたが、少しずつみんなの気持ちも広がっていったという感じです。今では、伴奏にみんなの声が負けてしまいそうなぐらいです。今度は歌の方でも中学部のすばらしい演奏に負けないように頑張っていってほしいです。

『校歌』　　矢澤　典子（中１）

私は毎週月曜日、ワルシャワタイムで美樹ちゃんとミチさんと交替で「校歌」のピアノ伴奏をしています。初めのうちは平山君が１人でやっていてくれました。そして今は、中学部みんながそれぞれ違う楽器を持ち、にぎやかにやっています。今は、清水さんや荻野君も一緒にやっています。

毎週違う楽器を演奏するのですが、私はどの楽器の音も大好きです。何だか校歌の歌詞とともに、ワルシャワ日本人学校独特のメロディーみたいになって、とてもおもしろいです。これからも、もっと楽しくやりたいと思います。みんなも、もっと大きく元気な声で歌ってくれると嬉しいです。

ワルシャワタイムの発表風景　中学生

『ワルシャワ』　　佐々木　渉（中３）

３年生になって新しく入ってきた事といえば、ワルシャワタイムである。３年は司会をやる事になり、最初はちゃんとできるかどうか心配だった。しかし、今は１日の習慣となって大分なじんできました。

でも、大変な事もあります。それは、朝のあいさつです。初めは、天気の事を毎日同じ様に繰り返していたので、色々な事を工夫しながら言うことになりました。なので、ますます大変になりました。

今までワルシャワタイムでやって来て、みんなの前で詩や作文などを読む事はとても良い事だと思います。日本ではこのような事をする機会がないので、これからもワルシャワタイムを続けていきたいと思います。

『詩の朗読―「夕焼け」』　　清水瑠沙香（中２）

私が聴講生として日本人学校に来たのは今年で２回目だが、去年と比べて今年は色々とイベントが多くなっているようだ。

毎朝、各学年が詩などを発表する「ワルシャワタイム」もその１つで、私たち中２がやったのは「夕焼け」という詩だった。それまでにも何回か他の学年の朗読を聞いていたので、だいたいどんなものか見当がついていたが〝何か皆をハッとさせる新しいもの〟を取り入れようということで、ＢＧＭを使うことにした。

曲はサティから選び、先生と他の２人とで真剣にそれぞれの読むパートを検討したあと、ＢＧＭと合わせて練習した。全部で２時間くらいしか時間がなかったが、それでも本番では結構うまくできたと思う。

詩の朗読など今まで１度もやったことがなかった私には貴重な体験だった。教科書に載っている詩もこんなふうにしてやってみると、なかなかおもしろいものだ。

中学３年によるワルシャワタイム

『今年の中学部』　　平山　喬（中３）

今年の中学部は、今までの中学部と比べてかなり変わったと思います。ワルシャワタイムやキャンプなどを通じて、”中学部はみんなから頼れる人達”という今までにない印象がとても強くなったと思います。

また、特に中学３年生の存在がとても強くなったと思います。しかし、それだけ３年生の責任が重くなり、大変になったのかもしれません。まだまだ中学部は、先生たちから言われたとおりにやる受け身の形なので、これからは、自分達から積極的に意見を出すようになれば、もっと日本人学校が良くなって行くと思います。

5）ワルシャワタイムの実践内容

1．国語科

①　朗読と群読

〈低学年〉

教科書「あいうえお」　私の作った詩の紹介「新学期を迎えて」（小１、２）

〈中学年〉

教科書「シャボン玉」「みいつけた」（小３）物語を読む、宝物をさがして（自作の物語紹介）

〈高学年〉

教科書冒頭の詩の暗唱と群読（上下巻）「われは草なり」「馬で駆ければ」「ガオーッ」（小５）「自作の詩の紹介」（小５、６）「赤い実はじけた」（小６）短歌の暗唱と朗詠（小６）

〈中学部〉

教科書「朝のリレー」「あの坂を上れば」（１年）「夕焼け」（２年―ＢＧＭつき）

「私を束ねないで」（３年）「星野富弘さんの紹介」（３年）

②　学習発表会にむけての群読

・「平家物語」、「おまつり」の練習

③　インタビューをしよう（６年）（５年）

・「私の宝物」「今している遊び」

④　スピーチに挑戦…高学年以上

⑤　司会の仕方を覚えよう…中学生を中心に

⑥　アナウンサーになって実況放送（６年）

「オゾン層についての説明文を記者になって紹介」

⑦　言葉遊びを

・「詩のなぞなぞ…題名当て」（５、６年）

⑧　研究発表…日本人学校について

（行事ベスト10、先生、生徒数の変化、古い先生へのインタビュー）

校庭でのワルシャワタイムの発表風景

2．生活科（低学年）

・私の家族、ペープサート（３学期）

3．英語科

・英語の歌「ウイーアーザワールド」「イエスタデイ」「イマジン」

4．ポーランド語

・交歓会の準備を兼ねて１人ひと言のスピーチ

5．学校行事・活動から

①　１学期の初めに……全員の決意

②　行事の後で……キャンプについて

③　みんなで校歌を歌おう

・ピアノ伴奏を生徒の手で。

・中学部オーケストラによる伴奏で

6）考察

試行錯誤の中で実施してきたが、１学期は計画的に、実施案にそうように、曜日によって違う学年が担当するという形をとろうとした。しかし、実施していく中で、ひとつの型となるまでにはずいぶん時間がかかった。

そこで、２学期からは実施可能な学年や教科担当者が相談しながら実施していくという方法を取ることにした。しかし、毎日の継続的な活動であるだけ

に、どの教科や学年もできない場合も出て、結局は私の担当していた高学年か中学部の国語で調節することになった。

しかし、当初から国語科の「話す・聞く」能力を高めたいというねらいもあったので、苦しみの中にも1年間を通して活動した中で得たものは大きかった。それは、児童・生徒の感想にも表情にもはっきりと現れていると思う。

ワルシャワタイムの時、私たちの番が来て、声が出なかったらどうしようかと色々なことを思いながら前に出ました。先生が、「5年生が『銀河』という詩を覚えました。”どっちもいい名前だなあ”というところをみんなで一緒に言って下さい。」と言いました。みんなが私たちの方を見ていたので、少し恥ずかしくなりました。そして”どっちもいい名前だなあ”と言うところになりました。「どっちも、どっちも、どっちも、どっちもいい名前だなあ。」とみんな私たちに負けないくらいの声で言いました。その時少し元気が出てきて、いやなことを忘れました。

（5年生の村尾有香さんの感想）

徐々にではあったが、生徒自身が自覚を持ち、いきいきと活動し、聞く楽しさ、話すことのよろこびや難しさなどを実感してくれているという手ごたえを私は感じた。

8）シレナ（日本人学校の『学校だより』）の中に見られるワルシャワタイム。

文章は派遣教員が順番に担当して書いたもので、それぞれの教員の目から見た印象が分かります。

○シレナ（日本人学校の学校だより92年度版）12月の中に見られるワルシャワタイム

中学生の司会で始まり、1週間の初めは全員で気持ちよく校歌を歌います。校歌を中学生が合奏したこともあります。また、制定前の古い校歌の歌詞で歌ったりもしました。

12月のワルシャワタイムの特色は、3つあります。

第1は、スピーチです。高学年から始めた、3分間スピーチは全学年に広がり、今終わりの会でも各学年部で工夫しながらスピーチに取り組んでいます。

2つめは、研究発表を取り入れたことです。これも6年生の活躍です。「日本人学校ができてからの行事ベスト10」「生徒数の変化」「派遣教員の出身地別グラフ」「生方先生、下田先生へのインタビュー」国語の時間に調べたことを立派に、そしてユニークに発表しました。

3番目は、今学期の最後の行事である交歓会の時に発表する『一人ひとことのポーランド会話』をベロニカ先生の指導で発表したことです。1番大きな声でしっかりできたのは、低学年のみんなでした。2年の竹内さん、4年の高橋君、5年の沢井さん、聴講生のカロリーナさんなどの手伝いもあって、本番でも見事に発表できました。

とにかく、1日に1度全校生徒が顔を合わせて、生徒の活動をしていくことは、教師のお説教の何倍もの力を持っているように思います。

○シレナ（日本人学校の学校だより93年度版）の中に見られるワルシャワタイム10月

9月のワルシャワタイムでは、「僕、私のポーランド」をテーマに子供たちが発表しました。日本や他の国々からポーランドにやって来て、ポーランドという国やポーランドの人々に対して感じていることを子供の視点からまとめたものでした。ポーランドへの転出を知らされた時の動揺、友人との別れ、初めて降り立った薄暗いオケンチェ空港でのポーランドという国への強烈な印象、そして、さまざまなポーランドの人々との出会い（嬉しかったこと、困ったこと etc…）

今後一層の国際化の進展が予想される今日、ワルシャワ日本人学校の子供たちは、ポーランドでのさまざまな体験を通しながら21世紀を担う国際人として育っているのだなと感じさせられました。

その他のシレナの中から

9月　平成4年度

2学期ワルシャワタイムについて

2学期も、講堂に毎朝みんなが一堂に顔をそろえてあいさつをすることから、1日が始まります。もう、すっかり習慣となってきました。人前に出て何かをするということは、それなりの緊張感を子供達に与えます。1学期のワルシャワタイムでの収穫は、1人1人が自信を持ち始めたことかも知れません。今でも、ベロニカ先生の指導で、小学2年生が発表した英語の発音の良さが印象に残ります。

さて、2学期のワルシャワタイムでは、大きな課題がひとつあります。それは、学習発表会で、毎朝の活動を保護者の方に見ていただこうということです。

1人1人の声がいきいきと響き、また、みんなの声がひとつになって聞こえるように、これから練習していこうと思います。

11月　平成4年度

1学期からのワルシャワタイムのまとめの発表の場としても大きな意味のあった“学習発表会”が終わりました。大きな行事を終えて、11月のワルシャワタイムでは、自分の思っていることを自分の言葉で話すという“スピーチ”に挑戦することになりました。上級学年を中心に、まだ始めたばかりですが4月からの学習の積み重ねがあったからでしょうか。また、学習発表会の成功が自信になったからでしょうか、これまでのスピーチでは、学習発表会のことや昨日のできごと、自分が感じたこと、学習したことなどを堂々と話してくれました。

1学期からのワルシャワタイムを振り返ってみると、各学年、それぞれの楽しい発表がありました。印象に残って、もう1度聞きたいという発表も多くなってきました。12月には、そのような発表を“アンコールタイム”で、もう1度聞くことができそうです。

1月　平成4年度

いまワルシャワタイムでは6年生によるインタビューをしています。インタビューの内容は、「あなたの宝物は何ですか。」です。先週5年生と中学部へのインタビューが終わりました。

子供たちの答は「先生からの手紙です。」「ポーランドに来る時に、日本の友達にもらった寄せ書きです。」「サッカーの試合のメダルです。」「旅行でいった先の写真屋パンフレットです。」「今集めているところです。」等々……。実際に、宝物を持ってきてくれた子もいました。

理由を聞いていると、それぞれの宝物の中には、自分の思い出とか夢とかがたくさん詰まっているのが良く分かります。子供たちには、今までの宝物を大切にしながら、このワルシャワ日本人学校でも、たくさんの新しい宝物を見つけていってほしいと思います。

2月　平成4年度

この頃のワルシャワタイムでは、詩や作文の発表が行われています。

作文では、このシレナに掲載されている、中学部の思い出のアルバムを見ながらの発表があったり、小学3、4年生の「4年1組ものがたり」や「宝物をさがしに」のように続きを聞くのが楽しみになるような発表もありました。

詩の発表では、少ないながらも個性豊かな子供たちの思いがあふれてくるようです。中には、ここでの暮らしの中からしか作ることができないような詩もありました。他の学年の発表を聞くのはいつも新鮮で、次の発表を心待ちにしているという声も聞きます。

3学期になって、中学生が考えてくれた言葉クイズも飛び出したりして、全員で楽しめる大切な時間になっているように思います。

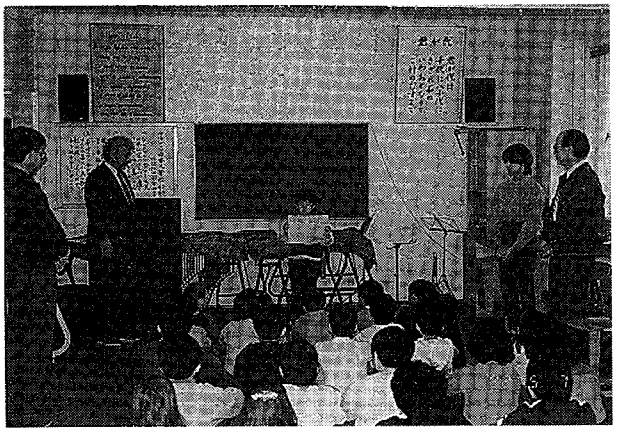
2月　平成5年度

最近、特にハッとすることがあります。当初は、興味や好奇心の眼差しで発表を聞いていた子供たちが、今はそれだけでなく一心に「発表する人を励まし聞こう！」としていることに気づいたからです。例えば、聴講生のお友達の初めての日本語の発表の後の子供たちの反応と拍手は、とてもすがすがしいものでした。そして、今、自分の気持ちを言葉で伝えることの難しさ大切さも感じています。温かい心と心のキャッチボールを、新しい毎日の朝に、みんなで積み重ねていきたいと思います。

3月　平成5年度

今年度の活動を振り返って

今年のワルシャワタイムで昨年度と1番大きく変わったところは「今日のバースデー」があったことではないでしょうか。自分の生まれた時のことを本人から発表してもらい、みんなからの「ハッピイバースデー」の歌のプレゼント、そして、長瀬先生手作りのカードを渡します。



低学年の発表風景

生まれた時の様子の話をみんなが真剣に聞いている顔、みんなの歌声、祝われている本人の照れ臭そうな、それでいて嬉しそうな顔、どれもが心温まるものです。みんなそれぞれが大切に育てられてきたということを感じる瞬間でもあり、自分自身でも気づく瞬間であったような気がします。大げさかもしれませんが「命の大切さ」を「今日のバースデー」で感じていてくれていたらとても嬉しいです。

小学校1年生から中学校3年生まで年齢差は大きいのですが、みんなが一堂に集まり、その中で集団としての影響を与え合える子のワルシャワタイムを大切にしていきたいと思っています。

3．朗読・群読とクラッシックミュージック（実践活動３）

1）はじめに

ポーランドに赴任が決まったときから、私の頭の中には１つの夢がうず巻いていた。

今も権威あるコンクールとして名高い「ショパンコンクール」が開催される街、ワルシャワ。

ショパンの国へ赴任するからには、何とかショパンや音楽と結びついた国語学習ができないものだろうかとひそかに考えていた。

ショパンの像の前での音楽会

異国の地、それも日本とポーランドという遠く離れた２つの国ではあるが、国語学習の中でひとつに結びつけることはできないものだろうか。そして、それはそのまま、子供たちと国際理解について考える材料となっていくものとなるのではないかとも考えた。

2）学習へのいざないと私の思考

(1) ワルシャワタイムとのかかわり

92年４月から始めたワルシャワタイムは、１学期を過ぎると、毎日の全校学習活動として定着してきた。児童・生徒も、少しずつ発表することへの不安も消え、声を出す楽しさを感じつつあるように思えた。（この実践については別稿「ワルシャワタイム」参照）この生徒たちの力をもっと生きた場面で生かすことはできないだろうか。

(2) 学習の中でポーランドと日本をひとつにする

日本を離れて、ワルシャワにいるからこそできる学習。それは、ワルシャワ日本人学校の大きな特色と考えて良いだろう。もし、地理的には遠く離れている日本とポーランドという２つの国を学習の中でひとつにすることができるならば、こんなにすてきなことはないと私は考えた。

非常にポーランド的なもの、音楽の国・ショパンの国。また、大変日本的なもの、古典「源氏物語」「枕草子」「平家物語」……この掛け離れたものをいかにして結びつければ良いのだろうか。

(3) 学習発表会という場

ワルシャワ日本人学校の年間行事の中でも、外部に開かれた最大の学校行事として毎年11月初旬に学習発表会が位置付けられている。

学習発表会　兵頭大使閣下ご夫妻を迎えて

この発表会には、毎年交流しているポーランドの205番小学校や330番小学校も招待する。また、大使館からは、毎年、大使御夫妻にも来ていただいている。観客の中に、ポーランドと日本がある。この場で生徒たちの力を見てもらいたいと考えた。

3）「朗読・群読」にむかって

(1) 群読「平家物語」の学習意義

そこで、ワルシャワタイムが根づいてきた年の学習発表会では、毎日の活動で培ってきたことの総仕上げとして、日本の代表的な古典の１つ「平家物語」の群読と、クラッシック音楽を結びつけた学習を創造しようと試みた。

もちろん私にとっても初めての経験であり、うまく学習として成立するかどうかには不安もあったが

① ポーランドで日本の古典を取り上げて小学生から中学生までが群読することによって、古典に親しむことができる。

② 「平家物語」は、盲目の琵琶法師によって語り継がれた語りの文学であり、音読・朗読に適している。

③ 「平家物語」を群読することによって、和文と書き下し文を１つにした『和漢混交文』のリズムを体に感じることができる。

④ 音楽と朗読を合体させることによって、「聞きながら話す力」・「話ながら聞く力」を育てることができる。

⑤ 古典の内容を細かくはつかめないポーランドの人達にも、音楽の力を借りて、情景を想像さ

せたり、内容を伝えることができる。

⑥　源氏と平氏という２つの対立するものを、舞台の上で『白』と『紅』の色彩で表現でき、見て楽しむこともできる。

⑦　ポーランドの人達も来る学習発表会という場での発表をめざして、日本とポーランドという２つの国をかかわらせた国語学習ができる。

このようなさまざまな可能性が考えられたからである。

(2)「平家物語」のどこを群読させるか。

国語の教科書の中に２年生の学習の１つとして、「平家物語」が挙げられている。その部分は、那須の与一が扇を射当てる前後の場面であり、荒れ狂う風と波の中で与一の心が表されている非常に緊迫した場面である。教科書で学習ずみで、子供たちに場面を想像させやすいし、これに冒頭の「祇園精舎」とナレーションを加えて１つの作品にすることにした。

(3)　群読「平家物語」への試練

まず困ったのは、人数である。群読となると、ある程度の人数が欲しい。また、この場面の雰囲気を出すには男性の力強い声と女性の柔らかで美しい声の両方が欲しい。しかし、全校で32名しか生徒はいない。その中で、「平家物語」の内容や場面を理解させ、表現させていくためには、中学生を中心としなければならない。（この年、学習発表会時には低学年10名、中学年５名、高学年９名、中学生８名の在籍があった。）

そしてこの年、私は中学生の担任であり、喜ぶべきことに８人もの中学生がいた。（この小規模校で中学生が全校の４分の１もいることは、驚くべきことである。）そして、中学３年生の男子が３人もいたのである。これなら、迫力を出せる。「高学年と中学生で群読しよう。」と、私の心は決まった。

次に困ったのは、音楽である。どうしても、ショパンは使いたかった。数人のピアニストの引くショパンの中から私が感じる「平家物語」と重なったのは、ポーランドに住んでいる日本のピアニスト小林倫子さんの弾く、『ノクターン嬰ハ短調（遺作)』だった。これは、冒頭の「祇園精舎」の群読と重ねて１つの作品にすることにした。

「平家物語」の全編を貫く「人間のはかなさ、人生の無常観」を表現した冒頭の雰囲気を、この『ノクターン嬰ハ短調（遺作)』なら壊さずに伝えることができると考えたのである。

ナレーションの部分は、静かな曲である『パッヘルベルのカノン』をＢＧＭとしてつかうことにした。

さて、問題の『扇の的』の部分だが、ショパンではどうしてもイメージが重なり合わない。ドボルザークもだめ、チャイコフスキーもだめ…。あれもだめ、これもだめと日は過ぎていくばかりだった。そんなある日、偶然に手に取ったベートーベンの曲を聴いた。「これだ！」。やっと私のイメージする『平家物語』と重なり合う、迫力と悲しさを持った曲とめぐり会うことができた。

私を興奮させたその曲は、ベートーベン『レオノーレ序曲２番』であった。

(4)　群読「平家物語」への準備

STRESZCZENIE　SZTUK

"ZAMIEFSZANIE W KRAINIE BAJEK"

Dzisiaj będziecie Państwo świadkami pierwszego wystawienia tej sztuki.
Pity przygotowuje się właśnie do tego by zostać aniołem z księgi, którą dostał od Boga. Paty, również uczeń na anioła bardzo lubi robić różne kawały. Na skutek jednego z nich księga zawierająca dwie różne bajki - "Kopciuszek" i "Złota kaczka" upadła tak niefortunnie, że bajki się pomieszały. Pity i Paty będą próbowali doprowadzić wszystko do porządku i szczęśliwego zakończenia. Czy im się to uda ? Przekonajcie się Państwo sami.

"HEIKE MONOGATARI"

"Heike monogatari" jest bardzo znaną, dawną opowieścią o rodzie wojowników o nazwisku Heike. Przez 20 lat walk zdobywali oni chwałę i potęgę. U szczytu władzy i majątku wszyscy giną podczas bitwy w morskich falach , a wraz z nimi cała ich potęga. Przez całą opowieść przewija się wątek ulotności i przemijania życia ludzkiego. "Heike monogatari" opowiadali dawniej ślepcy przy akompaniamencie przejmujących dźwięków biwa. Naszej interpretacji natomiast będzie towarzyszył utwór Fryderyka Chopina.

"ŚWIĘTO"

Autorem tego utworu, który powstał w 1919 roku jest Kitahara Hakushu.
Uczniowie szkoły japońskiej, występując wszyscy razem postarają się oddać atmosferę i nastrój japońskiego święta. Zwróćcie Państwo szczególną uwagę na rytm i siłę tego utworu.

"TACY DETEKTYWI SĄ TYLKO DWAJ!"

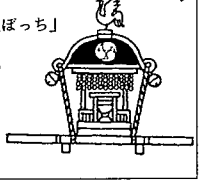
Skradziono słynny obraz należący do bardzo skąpego prezesa firmy Oshii. Pan Oshii dostaje list, że obraz zostanie zwrócony za sumę 3 milionów jenów. Do odnalezienia obrazu zostają wynajęci dwaj sławni (czyżby na pewno?) detektywi - Oda i Nakada. Przy okazji tej zagadki wychodzą na jaw spory kłopoty rodziny Oshii...
Czym się to wszystko zakończy ?

解　説　　ワルシャワ日本人学校

1．プログラムナンバー２．劇「童話の国は大さわぎ！」
この劇は、オリジナルの脚本です。今回の舞台が初演になります。
天使の卵ピティーが、神の国の童話の本を落としてしまったばかりに、「シンデレラ」と「金のガチョウ」が、混ざってしまったり逆さになってしまったり。もう一人のいたず好きの天使の卵パティーと力を合わせて、童話の国へお話をもどしにいきます。
さて二人は、お話をもとにもどせるでしょうか。

2．プログラムナンバー３．群読「平家物語」
「平家物語」は、日本の代表的な古典のひとつです。
栄華と権力を極めながら、たちまち没落し、海に消えてしまった平家一門の約20年にわたる栄枯盛衰の物語です。
この冒頭には前編を貫く「人間のはかなさ、人生の無常観」が語られています。「平家物語」は、盲目の琵琶法師によって、もの悲しい琵琶の音色にのせて語られました。
今日、私たちは、クラッシックの曲にのせて、私たちの「平家物語」をお聞かせしたいと思います。

3．プログラムナンバー６．群読「お祭り」
この詩は、北原白秋が大正７年に発表したものです。
日本のお祭りの様子を、日本人学校全員が表現します。
そのリズム・迫力を十分鑑賞してください。



4．プログラムナンバー８．劇「名探偵は二人ぼっち」
けちで自分勝手な押井電気会社社長の名画が盗まれます。絵が返して欲しければ、3000万円出せと犯人から連絡があります。事件の解決を頼まれたのは、迷？探偵の小田と中田。事件の裏には複雑な家庭事情が一杯。
さて、結末は、どうなりますことやら。

群読『平家物語』1

1、全員登場する。
2、並んだところで、礼をする。
3、ショパン『ノクターン嬰ハ短調（遺作）』が流れる。

全員　祇園精舎の鐘の声
中学　祇園精舎の鐘の声
三年　祇園精舎の鐘の声
全員　諸行無常の響きあり
三年　諸行無常の響きあり
全員　沙羅双樹の花の色
中学　沙羅双樹の花の色
三年　沙羅双樹の花の色
全員　盛者必衰のことわりをあらわす
三年　盛者必衰のことわりをあらわす
全員　おごれる人も久しからず
中学　ただ春の夜の夢のごとし
三年　ただ春の夜の夢のごとし
全員　猛き者もついには滅びぬ
中学　偏に風の前の塵に同じ
三年　偏に風の前の塵に同じ

ナレーター中央にでて

1、皆さん今日は、中学部・高学年による群読を聞いて頂いています。
2、この「平家物語」は、日本の代表的な古典の中のひとつです。
1、栄華と権力を極めながら、たちまち没落し、海に消えてしまった平家一門の約二十年にわたる栄枯盛衰をかたった物語です。
2、この冒頭では、全編を貫く「人間のはかなさ、人生の無常観」が語られています。
1、「平家物語」は、盲目の琵琶法師によって、もの悲しい琵琶の音色にのせて語られました。
2、私たちは、ショパンの曲にのせて、私たちの「平家物語」を考えました。

三年　祇園精舎の鐘の声
全員　祇園精舎の鐘の声
三年　諸行無常の響きあり
三年　諸行無常の響きあり
三年　沙羅双樹の花の色
全員　沙羅双樹の花の色
三年　盛者必衰のことわりをあらわす
三年　盛者必衰のことわりをあらわす

群読『平家物語』

（BGM　パッヘルベル　カノン）

これから群読しますのは「平家物語」の「扇の的」の部分です。

簡単に内容を紹介します。

夕暮れ、戦をやめて、源氏が退こうとするところへ、さおの先に紅の扇をつけた一そうの小舟が現れ、美しい女房が陸に向かって手招きをします。源氏の大将、判官義経は家来と相談し、この扇を射させることにし、那須の与一がその役に選ばれます。

与一は一度辞退するのですが、義経に許されず、自分の命をかけて馬を海に乗り入れます。源氏方一同は期待を込めてこれを見つめています。

扇は折からの強い北風と荒波で揺られ、ひらめいています。与一は、源氏・平家の両軍がかたずを飲んで見守る中、「もし失敗したら、自害しようと」強く決心し、神に祈るのです。

その甲斐あってか、与一は、見事に的の扇を射当て、敵も味方もいっせいにほめたたえます。

感極まって、平家の老武士がその船に立ち上がり、風流に舞を舞い始めるのですが、義経は、与一にその武士を殺せと命令を下し、与一は、扇を射た同じ弓で、その武士を射て殺すのでした。

以上の部分を、向かって右側が平家、左側が源氏になりまして、群読いたします。

「平家物語」は、盲目の琵琶法師によって、もの悲しい琵琶の音色にのせて語られました。

私たちは、ベートーベンのレオノーレ序曲2番曲にのせて、私たちの「平家物語」をお聞かせしたいと思います。

「平家物語」群読用台本

『平家物語』2

全…全員　中…中学生

B　ころは二月十八日の酉の刻ばかりのことなるに
全B　おりふし北風はげしくて磯打つ波も高かりけり
B　舟は、揺り上げ揺りすえ漂えば
A　扇もくしに定まらずひらめいたり。
全B　沖には平家、舟を舟を舟を一面に並べて見物す。
全A　陸には源氏、くつばみをくつばみをくつばみを
全A　くつばみを並べて、これを見る。
全AB　いずれもいずれも晴ならずということぞなき。
A　与一目をふさいで「南無八幡大菩薩、我が国の神明、宇都宮、那須の湯泉大明神、願わくは、あの扇の真ん中射させてたばせたまえ。
（中略）
美樹典子　舟のうちより、年五十ばかりなる男の、黒皮おどしのよろい着て、
美樹典子　白柄の長刀持ったるが、扇立てたりけるところにたって、舞いしめたり。伊勢三郎義盛、与一が後ろへ歩ませよって、「御定ぞ、つかまつれ！」と言いければ、今度は中差取ってうちくわせ、よっぴいて、しゃ頸の骨をひょうふっと射て、舟底へさかさまに射倒す。
全AB　舟底へさかさまに射倒す
全B　平家の方には、音もせず。
全A　源氏の方には、また、えびらをたたいてどよめきけり
AB　「あ、射たり！」という人もあり、また、「情けなし…」という者もあり。

(5)　群読「平家物語」の生徒感想

3年　原　大喜（ポーランド在住3年目）

今年の学習発表会は、去年と違って自分たちで工夫したり考えたりしたものがとても多かった。「平家物語」は、みんなの声を合わせていくのが難しかった。（中略）僕は、「平家物語」で、那須の与一役だった。大きな声を出すのは簡単だったけど、やっぱり難しかった。いい経験になった。

那須の与一役のソロの部分

3年　佐々木　渉（ポーランド在住2年目）

今年の学習発表会は2回目だったけど、初めての経験がいくつかあった。1つは、クラシックによる「平家物語」である。日本の古典をクラシックでやるという一見変わったものだが、内容と曲がなかなかマッチした良いものだと思った。

男子による平家方の群読

3年　平山　喬（ポーランド在住3年目）

今年は、新しい試みとして群読をし、見事成功しました。新しいことなので、当然ゼロから始めなければなりません。だから、この群読を受け持った寺本先生はさまざまなところで苦労したと思います。しかし、成功させた喜びは、僕たちよりもずっと大きかったと思います。

2年　樋口　美樹（ポーランド在住1年目）

私は「平家物語2」『扇の的』は、やっていてもすばらしいと感じました。最初は「えー、また、古典？また？1年生の時もやったじゃない！読みにくい言葉ばっかりだし…いやだなあ…。」と思っていました。

しかし、練習も良くマッチした音楽に合わせると、ない時よりもぐっと盛り上がりが出て、与一が老武

士を射て殺してしまう時の盛り上がりは最高だと思いました。

ベートーベンの「レオノーレ序曲第２番」は「私たちが群読するので、この内容に合うものを作って下さい。」とオーダーしたみたいでした。聴いていた人も、きっといろんな場面が想像できて、長い間、聞いていても（難しいのに）飽きないものだったと思います。

中学女子によるナレーション

聞いていた人（家族）にインタビュー。

「「平家物語」の群読どうだった？」

「うん、とってもよかった。小学生や中学生の時に覚えたことは、大人になっても忘れないから、ぜひみんなが覚えるといいよ。音楽も良かったね。迫力があったわね。」

といってくれました。聞いていた人の印象も良かったのだと思います。

この機会に、古典が身近なものになり、そして、興味あるものになったと思います。もっとたくさんの古典を知って、親しみを持つことができたらいいなあと思いました。

（ちなみに私は「扇の的」を全部覚えることができました。大人になっても忘れないと思います。）

１年　矢沢　典子（ポーランド在住３年目）

「平家物語」は暗記がありませんでした。しかし、その分みんなと息を合わせるのが難しかったです。本番は、何といってもこれにあった音響が全体を助けてくれたんだと思います。

全体的に今年の学習発表会は、私の経験した中では１番中身が濃かったと思います。

４）新たな「朗読・群読」にむかって

(1)　新たな目標

「平家物語」の群読を自信にして、翌年、93年度の学習発表会では新たな群読に挑んだ。この学習発表会は私にとってポーランドでの最後の発表会である。

この年、私には２つの大きな目標があった。

①「ポーランド語での朗読」への挑戦

ポーランドに私は住んでいる。その国に感謝の気持ちを込め、そして、生徒１人１人の心の中にポーランドの『言葉の記念碑』を１つは作っていくことが、国語科教師としての仕事であると私は考えている。

そして、発表会の会場に来た皆さんと児童・生徒、教員が１つになってポーランド語で朗々と詩を朗読できないものだろうかと考えた。

こう考えたのは、ワルシャワ大学日本学科で見た１冊の本との出会いからであった。それは、日本の詩をポーランド語に訳し、ポーランドの詩人がリズムをつけた『冬の桜』という本であった。

『冬の桜』表紙

原　民喜

コレガ人間ナノデス

コレガ人間ナノデス
原子爆弾ニ依ル変化ヲゴラン下サイ
肉体ガ恐ロシク膨脹シ
男モ女モスベテ一ツノ型ニカエル
オオ　ソノ真黒焦ゲノ滅茶苦茶ノ
爛レタ顔ノムクンダ唇カラ洩レテ来ル声ハ
「助ケテ下サイ」
ト　カ細イ　静カナ言葉
コレガ　コレガ人間ナノデス
人間ノ顔ナノデス

Hara Tamiki

To mają być ludzie...

To mają być ludzie?!
Popatrzcie, proszę, co z nich zrobiła bomba atomowa.
Straszliwie nabrzmiałe ciała.
Nie odróżnisz mężczyzny od kobiety!
O! Ze spuchniętych warg tej osmalonej na czarno, bezkształtnej
i jątrzącej się od poparzeń twarzy dobywa się głos,
słabiutkie, cichuteńkie słowa:
"Pomóżcie, proszę..."
I to właśnie, to ma być człowiek....

『冬の桜』本文

②「平和を訴えよう」修学旅行での体験を重ねて
（戦争の傷跡を残す２つの国がひとつになって）

世界に出て異文化の中で暮らしている子供たち。日本という視点ばかりではなく、地球的な目を持ち、これからの世界をよりよく作っていってほしいと私は願う。

３年生の教科書にある「ヒロシマ神話」の叫び・悲しみ・恐怖。アンネ・フランクもいたポーランドの強制収容所オシュフェンチェム（アウシュビッツ）の叫び・悲しみ・恐怖・狂気。共に戦争の深い傷跡を持つポーランドと日本、２つの国がひとつになって、平和を訴えていくことはできないか。

小さいけれども、その第１歩をワルシャワ日本人学校の中学生が作っていこうと呼びかけた。

この前の年、私が中学部の担任だった時、修学旅行で北ポーランドに行った。その時、訪ねたベステルプラッテ（ドイツ軍の侵攻によって第２次大戦が

始まった場所）の印象とことばも生徒の心に強く刻まれていた。

中学１年　坂元孝太郎

ヴェステルプラッテの記念碑は遠くから見ると小さいようだけど近くに行くととても大きく堂々としていた。僕もこの記念碑のように堂々と生きていきたいなと思った。それにしても、ドイツの攻撃にたった182名で、よく１週間も耐えることができたなと心を打たれた。

ヴェステルプラッテの記念碑

中学３年　原　大喜

ヴェステルプラッテで、たった182人のポーランド軍がドイツの大軍と戦い、よく１週間守り続けたと思う。全滅してまで国を守ろうとした人達は本当にすごい。近くに、「戦争はもうしない」（NIGDY WIECEJ WOJNY）と書いてある文字の横の丘の上に高い記念碑が建っていた。

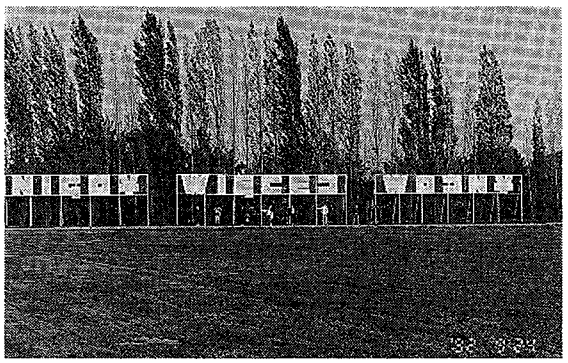
ヴェステルプラッテの戦車で

『知らないポーランドを見つけた』　１年　矢澤典子

まず、１日目。出発して４時間、マルボルクに着きました。

ワルシャワのスターレミアストと同じで、第２時世界大戦で破壊されたのをポーランドの人達が復元したもので、さすがに驚かされました。

ヴェステルプラッテの記念碑と、「戦争はもうしない」（NIGDY WIECEJ WOJNY）の文字は、ここで守った182名のポーランド兵士や第２次世界大戦の



（NIGDY WIECEJ WOJNY）

ことなどを忘れさせないで、自然と残されているのがポーランドらしいと思います。バルト海の海水もさわってどんどんポーランドになじむことができたように思います。

今なら、そして、この体験を持つ生徒なら、一緒に実践していくことができるに違いないと考えた。

(2)　中学生（坂元孝太郎）の学習記録から

「国語学習と学習発表会」

◎準備➡総練習➡
　➡本番➡復習

◎昨年
　「平家物語」群読

・自己の殻を破る
　「平家物語」群読
　新しい自分との出会い

（感想）音楽と群読が非常にあっていて驚いた燃えた。初めての出会いがあった。

◎今年

１．平和を訴えたい。

２．ポーランド語の解説をつける。

・オシュフェンチェム……人間の叫び・悲しみ・恐怖・狂気。

・マイダネック……人間の叫び・悲しみ・恐怖・狂気。

⇧　⇩

残している国、ポーランド　修学旅行での体験

⇧⇩

・唯一の被爆国、日本……ヒロシマ、ナガサキ
　人間の叫び・悲しみ・恐怖・狂気。

海外に住む中学生として、平和への叫びをことばを越えて伝える

(3)　群読・朗読への準備と台本

ＢＧＭにはポーランドの現代作曲家であるグレツキ氏の戦争の悲しみを表現した「シンフォニー」を使い、「ヒロシマ神話」を群読することにした。

ポーランド紹介３

マイダネック収容所

「こんなにやせて、ころされちゃったんだ。」

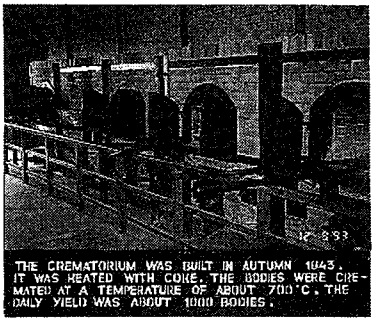
分かっているのかいないのか、こんな言葉を４歳の娘がつぶやきました。それほど強烈な印象をこのマイダネック収容所は持っています。

アウシュビツは皆さんもご存じでしょう。（これはドイツ語読みであって、ポーランド語ではオシュフェンチェムといいます。）しかし、これと並ぶ収容所がルブリンという町にあります。ワルシャワから、ビスワ河を越えて南東へ約160キロ。広々とした土地の中に不気味に昔の姿を浮かばせているのが、このマイダネック収容所です。

収容所の手前には、大きな石碑が建てられており、その石碑から収容所までは１直線に見える『死の黒い道』が続いています。

そこには、大きな記念碑が建てられ、大きな屋根の下に、人間を焼いたその灰が、うづ高く積まれています。（もちろん、その灰の中には小さな骨がいくつも見えています。）そこに、されげなく置かれた小さなろうそくとかれんな花が、余計に痛々しさを感じさせます。

その記念碑から少し離れたところにある煙突のある小さな小屋。まあ、行ってみるかと軽い気持ちでそこに入ったのですが。入り口からすぐ目の前に映ったのは、焼却炉。



焼　却　炉

これ１つで、１日100体の人間を処理できたのだそうです。つまり、10炉ありますから、１日1000体処理したのです。何だか、いまでも死体のこげる匂いがしそうで、ゾーッと寒けがしてきます。次のシャワー室。シャワー室とは名ばかりで、ただ天井に水の吹き出し口が無数に付けられているだけです。たぶん、強い圧力で、冷たい水がここから吹き出し、たくさんの詰め込まれた人々の体をぬらしたに違いありません。芋洗いです。

きれいな体にして、その次はあるのはガス室です。身につけているものはすべてはぎ取った上に、このガス室で殺し、焼却します。その上、次の部屋には手洗い場のようなものがあります。つまり、ここで、処理した死体の灰の中から金歯や銀歯などを捜したわけです。取れるものは、すべて取るのです。

また、身を凍らせるのは、ガス室の隣にある小さな部屋です。つまり、ガス調節室とでも言ったら良いでしょうか。小さなのぞき窓から、ガスで死んでいく人々の様子を見ながら、ガスを調節していたのかと思うと、人間の残酷さは一体どこに限りがあるのだろうかと、そこ知れない恐怖感を抱かせます。

別棟にある展示室には、ここで使われたガス缶が山のように積まれていました。一体１缶でどれくらいの人間を殺したことでしょうか。

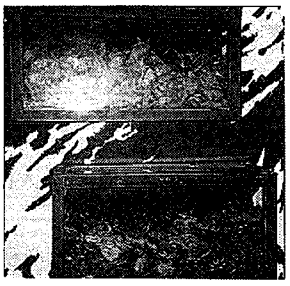
収　容　所

ガス缶

次の部屋には、果てしなく積まれ、並べられた靴・靴・靴。大人の靴にはさほど心を動かされなかったのですが、次の部屋も、また靴・靴・靴。ところが、これがすべて子供の靴なのです。そのかわいらしいはずの靴が、なぜこんなにも悲惨な感じを心に持たせるのでしょうか。靴から、当時の子供たちの叫びが聞こえてきそうです。

メガネ、歯ブラシ、くし、髪の毛、すべてのもの、そして、命まで奪ったのです。

靴・靴・靴



髪　の　毛

日本では、広島に原爆資料館はありますが、戦争の傷跡はできるだけ消す方向で復興が行われてきたような気がします。

しかし、ここポーランドがすごいなあと思うのは、そういう傷跡を国内に残すことによって平和を誓ったことです。

マイダネック内部には、悲しさ、怒り、狂気…が満ちあふれています。本当は、50万人もの人を殺したこんな施設など、きれいさっぱり取り払って、この恐ろしい記憶は消してしまいたかったのではないでしょうか。

日本の中学生に、ぜひとも見てほしいなと感じました。

高学年・中学部群読『ヒロシマ神話』

嵯峨信之

17
23
女子　失われた時の頂にかけのぼって
女子　何を見ようというのか
男子　何を見ようというのだ

女子　一瞬に透明な気体になって消えた
男子　一瞬に消されてしまった
女子　数百人の人間が空中を歩いている
全員　歩いている　56

数字は音楽をあわせるための目安の時間

58
A　死はぼくたちに来なかった
全員　来なかった
B　一気に死を飛び越えて魂になった
全員　魂になった
C　われわれに、もういちど、人間のほんとうの死を与えよ
全員　ほんとうの死を与えよ　1・17

女子　そのなかのひとりの影が石段に焼きつけられている

B　わたしは何のために石に縛られているのか
全員　わたしの肉体を返せ　1・24
B　影をひき放されたわたしの肉体はどこへ消えたのか
全員　人間として死なせてくれ
B　わたしは何を待たねばならぬのか
全員　あなたがすくってくれるのか！　1・44

女子　それは火で刻印された、二十世紀の神話だ。
全員　火で刻印された神話だ　2・00

ここの全員の部分は一線のところで、かぶせるように入ること。要注意

女子　いつになったら
男子　誰が来て
女子　その影を石から解き放つのだ
男子　いつになったら解き放つのだ
全員　誰が解き放つのだ
全員　誰がこの冷たさから解き放つのだ　1・21

中学部群読『ヒロシマ神話』
ナレーション

孝太郎　「ニグディ　ヴィエンツェ　ヴォイニ」
孝　星　「ニグディ　ヴィエンツェ　ヴォイニ」
孝星美　「ニグディ　ヴィエンツェ　ヴォイニ」

孝太郎　「戦争は２度と繰り返さない。」というこの言葉が刻まれたヴェステルプラッテに立った時、戦争の愚かさ、平和の尊さをかんじずにはいられませんでした。

星太郎　1939年９月、ドイツ軍の攻撃により、第２次世界大戦が始まりました。
この戦争で世界中の人々が傷つきました。
ポーランドも、もちろん日本も。

美　樹　今日は、原爆によって大きな悲しみと苦しみを背負った、日本のヒロシマの叫びを聞いてください。
私たちは、この詩に出会った時、そして、声に出して読んだ時、この詩の込められた深い悲しみややり場のない怒りを感じました。
私たちのこの気持ちを、会場の皆さんに伝えようと、この詩の群読に挑戦しました。

孝太郎　今流れているのは、ポーランドの大作曲家『グレツキ』さんの『シンフォニーナンバー３』、戦争の悲しみを歌った曲です。

孝星美　では、もう１度、今度は中学部を中心とした群読をお聞き下さい。

ポーランド語によるナレーション

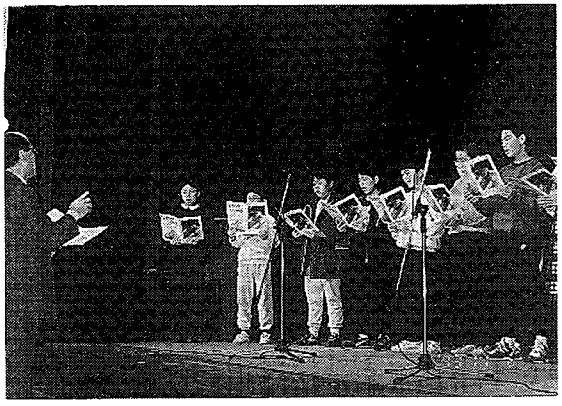
NIGDY WIEDEJ WOJNY

Słowa te, które poznaliśmy na Westerplatte uświadomiły nam bezsensowność wojny i potrzebę pokoju.
We wrześniu 1939 roku atak niemieckich wojsk rozpoczął drugą wojnę światową. Wojnę, która pozostawiła piętno w sercach i umysłach wielu milionów ludzi na całym świecie. W Polsce i w Japonii.
Prosimy posłuchać teraz wiersza "Legenda o Hiroszimie", który jest krzykiem bólu i cierpienia ofiar bomby atomowej z Hiroszimy. Jest to krzyk ludzi, którzy umarli w okrutnym cierpieniu, a cienie ich bolesnych sylwetek na zawsze wypalone są w kamieniu. Czy ktoś kiedyś pozwoli im wszystkim odejść w prawdziwą i spokojną śmierć?!
Staraliśmy się, aby naszą recytacją oddać rozpacz, ból i gniew - uczucia, które zrodziły się w naszych sercach, kiedy pierwszy raz czytaliśmy ten wiersz. Naszej interpretacji towarzyszyć będzie utwór polskiego kompozytora-Henryka Goreckiego.

(4)　実践後の（坂元孝太郎の）学習記録から

◎「ヒロシマ神話」の感想から

- 聴講生ブランカ…「自分もやりたかった。曲が詩とあっていて、恐ろしさや悲しみが出ていた。」



「ヒロシマ神話」の群読

- 観客ポーランド…「みんなが１つになっていた。準備も良くできていたし、広島を知っていた。」
- 保護者…「悲しみは伝わってきたが、内容が難しかった。自分が、戦争で亡くなった人の気持ちに少しなれたような気がする。」
- 自分…「初めてこの詩を読んだ時でさえ心に迫るものがあった。それを、たくさんの人々とＢＧＭの力を借りてやったので、日本語の詩だけどポーランドの人にも何かを訴えられたように思う。」

◎「朗読・群読」をした後の疲れ

もっと真剣にやれば、１回にすべての力を出しつくすことができたかもしれないが間にナレーションがあり、２回目は１回目にできなかった気持ちを込めて読めた。

(5) 小学生の感想から

6年　村尾　有香

私たちは今年、ポーランド語の朗読に挑戦してみた。高学年・中学部でポーランド語をしゃべれる人は4人ぐらいしかいないけれど、みんな本番まで発音などの練習をして、何とかきちんとした朗読を作り上げることができた。いよいよ本番になり、ドキドキしながら舞台に上った。何と言っても「秋の夜の会話」では、1人ずつ言うからドキドキするのは当たり前かもしれない。

学習発表会朗読原稿1（高学年・中学生）

『雲』

山村暮鳥（やまむらぼちょう）

おうい雲よ（おうい雲よ）

ゆうゆうと

ばかにのんきそうじゃないか

どこまでゆくんだ
（どこまでゆくんだ）

ずっと磐城平の方までゆくんか

（　）は朗読用につけ加えた部分

Yamamura Bocho

『Chmury』
フムーリィ

Hej, wy, chmury!
ヘイ、ヴィ　フムリィ!

Hej, wy, chmury!
ヘイ、ヴィ　フムリィ

Gdy płyniecie tak bez pośpiechu
グディ　プゥィニチェ　タク　ベス　ポシュピェフ

macie wygląd
マチェ　ヴィグロンド

całkowicie zobojętniałych na wszystko.
ツァウコビィーチェ　ゾボウェンツゥニァゥィフ　ナ　フシスツコ

Dokąd płyniecie?
ドコンド　プゥィニチェ？

Dokąd płyniecie?
ドコンド　プゥィニチェ？

Czy płyniecie do dalekiej równiny Iwakidaira?
チィ　プゥィニチェ　ド　ダレケイ　ルヴニーニィ　イワキダイラ？

□の部分を協力して下さい。
w tym migsiu zaprizamy do upzing neuytaji

高学年朗読『秋の夜の会話』

草野心平

女　子	さむいね
男　子	ああ　さむいね
女　子	虫がないてるね
男　子	ああ　虫がないてるね
恵梨沙	もうすぐ土の中だね
優　介	土の中はいやだね
有　香	痩せたね
浩　雄	君もずいぶん痩せたね
弥　生	どこがこんなに切ないんだろうね
健次郎	腹だろうかね
クレオ	腹とったら死ぬだろうね
洋　介	死にたくはないね
女　子	さむいね
男　子	ああ虫がないてるね
女　子	さむいね
男　子	ああ虫がないてるね

隆　一	KUSANO SHIMPEI
隆　一	Rozmowa zab w jesienna noc ズモーヴァ　ジャップ ヴィ イェシェイノ　ノッツ
女　子	Zimno dzis, co? ジムノ　ジシ　ツォ
男　子	O, tak! Zimno! オー　タク　ジムノ
女　子	Czy cykaja owady? チ　ツィカヨン オヴァディ
男　子	O, tak! Owady cykaja! オー　タク　オヴァディ　ツィカヨン
恵梨沙	Juz wkrotce skryjemy sie w ziemi, prawda? ユーシュ フクルトゥツェ スクリイエミ シェン ヴ ジェミ　プラウダ
優　介	Nie chce mi sie w norze przesypiac zimy! ニェ　フツエ　ミ　シェン ヴ　ノジェ　プシェイピャッチ　ジミ
有　香	Schudlas, wiesz? スフドゥアシ　ヴィエシ
浩　雄	Ty tez bardzo schudlas. ティ テシ　バルゾ　スフドゥアシ
弥　生	Gdzies mnie tak sciska, グジェシ　ムニェ　タク　シチスカ jakby ze strapienia wiesz? ヤクビ　ゼ　ストラピェニャ　ヴィエシ
健次郎	Moze to w zoladku! モジェ　ト　ヴ ジョウオンデゥク
クレオ	Kiedy zoladku sie skurczy, キェディ　ジョウオンデゥク　シェン　スクルチ to chyba sie umiera, prawda? ト　ヒバ　シェン　ウミェラ　プラウダ
洋　介	Alez kto by tam chcial umierac… アレシ　クト　ビ　タム　フチャウ　ウミェラチ
女　子	Zimno dzis, brrr! ジムノ　ジシ　ブルル
男　子	Aha! A owady cykaja… アハ　ア　オヴァディ　ツィカヨン
女　子	Zimno dzis, brrr! ジムノ　ジシ　ブルル
男　子	Aha! A owady cykaja… アハ　ア　オヴァディ　ツィカヨン

6年　沢井　恵梨沙

学習発表会では、ポーランド語と日本語で「秋の夜の会話」と「雲」を5・6年が中心に朗読した。「秋の夜の会話」は、2人ずつ出てくる時、みんなぴったり出てかっこ良かった。

「雲」は明るい詩で、みんなの声が揃ってすごく良くできたなと思う。「おーい雲よ」という時、本当に遠くに呼びかけている気がした。みんな大きな声でやって、すごくいい詩になったと思う。

ポーランド語での朗読「秋の夜の会話」

6年　高橋　浩雄

今回の朗読は、ポーランド語に挑戦した。「雲（フムーリ）」では、会場の人達にもやってもらって楽しかった。「秋の夜の会話」では、音楽と詩がとても良くあっていたと思う。ポーランド語をやるのは大変だと思うけれど、来年、再来年と引き継がれてもいいと思う。「ヒロシマ神話」は、とても力強く、戦争の悲しさを良く出せていたと思う。個人的にはこれが1番好きだ。

5）終わりに

「平家物語」、「ヒロシマ神話」「秋の夜の会話」「雲」の4つの詩の群読にワルシャワ日本人学校の国語科として挑戦してきたが、発表すべき場で、1人1人の子供たちが、快い緊張感を味わいながら、前向きにいきいきと活動してくれた。

学習発表会が終わっても、子供たちは「秋の夜の会話」の中で自分が分担した部分ははっきりと覚えているし、中には、詩を丸ごとポーランド語で覚えている5年生もいて、嬉しい限りであった。

「雲」は、もちろん私も今でも暗唱できる。声に出す度に子供たちと一緒に群読した時のことが思い浮かんで来るし、それぞれの子供たちの顔までも浮かんでくる。

この活動によって、子供たち1人1人の心の奥底にポーランド語の「言葉の記念碑」が残ってくれたのではないかと考えている。

ポーランド紹介4

ポーランドの迷信

1．食べるときに歌を歌うとばかな人と結婚する。
2．他人のウエディングドレスを着ると、結婚できなくなる。
3．結婚のときに雨が降ると、幸せになれる。
4．妊娠中の女性のいったことをかなえてあげないと悪いことが起きる。
5．妊娠中に醜いものや醜い人を見てはいけない。見ると生まれてくる子供がそうなる。
6．妊娠中に火事を見たら、自分の体に触れてはならない。触れるとおなかの子供は、その場所にあざができる。
7．妊娠中の女性が鍵穴から覗くと、生まれてきた子がロンパリになる。
8．赤毛の男も女も信用できない。
9．クリスマスイブの時、婚約者どうしが2人だけで話しをしたら、少なくとも1年は浮気をしない。
10．結婚の時のベールの下にお金を置いておくと金持ちになれる。
11．結婚の後、初夜に先に寝た人は先に死ぬ。
12．赤ちゃんはどこから生まれたか。キャベツ畑、こうのとりが運んでくる。
13．つばめが巣を作るとその家は幸せになる。
14．つばめが低く飛ぶと雨になる。
15．かっこうの鳴き声は（クックー）若いカップルがそれを聞くと、鳴き声の数だけ子供ができる。
16．夜、暗い部屋の鏡を見ると鬼が映っている。
17．五月の雨に当たると子供は大きくなる。
18．塩を落としたり、こぼしたりするとけんかになる。
19．間違って死んだといううわさがあると長生きする。
20．机の上に帽子を置くと、借りた金も返せないほど貧乏になる。
21．鏡が割れると7年間悪いことが続く。
22．小さな子供と一緒に鏡に近づくと後で子供はどもり始める。
22．小さな子にお父さんがプレゼントとしてガラガラをあげると、大人になって母親にお父さんの秘密を話す。
23．蜜蜂を攻撃してはいけない。
24．月曜日に旅立ってはいけない。
25．6月23日までは、川や湖で泳いではいけない。（昼が一番長い日、クパワの祭り…太陽の祭り）
26．幸せの花、5つの花びらのライラック、4葉のクローバー

4．ポーランド語に親しむために（実践活動４）

— ポルスクがるた作成について —

1）はじめに

ポーランドは歴史の中で３回も自国を地図の上から失っている。しかし、現在ここにポーランドという国があるのは、かのキュリー夫人の幼い頃のエピソードにあるように、ポーランド人たちが他国語をどんなに強制されてもポーランド語を愛し、ポーランド語を捨てなかったからであると私は思う。

ことばにはそれほど強い力があり、文化がある。

ポーランドに住む、未来を担う日本の子供たち。その教育を任された我々派遣教員がすべきことは、第１に、児童・生徒に学力をつけることであり、第２に、現地語に親しませることによって、他の土地ではなく、ポーランドで生きたという実感を持たせることであると私は考えた。

せっかく異文化の中で生活しながら、違う国や違う考えを素直に違うものとして受け入れようとはせず、日本を懐かしむばかりの生徒を育てるのではなく、ポーランドを知ろう、受け入れようとする心を持つ生徒を育てることが、より日本を知ることにつながり、児童・生徒を大きく育てていくことだと考えたのである。

2）生活の変化と願い

海外で暮らす日本人の心の中には、なぜか英語至上主義が根づいており、ポーランド語を勉強しても後で何の役にも立たないのだから覚える必要がないという考え方をする人がある。後進国の言語になればなるほどその考え方は強くなっていくようにも思われる。

数年前まで、１つの品物を手に入れるのにもかなり不自由だったポーランドで生活していくために、母親たちはポーランド語を話す必要に迫られ、ことばの好き嫌いにかかわらずポーランド語を覚えざるをえなかった。ところが自由経済への変革の中で、急激な速度で西側商品が入り出し、自分の手に取って品物を選べる店があちこちに現れてきた。買い物でも現地の人と会話する必要が薄れ、バーコードですべてが処理される「無言化社会」が広がり始めてきた。そのため、日本人の母親たちからもポーランド語を覚えようという気持ちが薄れてきているのである。まして、子供たちは言うまでもない。

そういう私も毎日学校と家との往復で、ポーランド語を話す場は自然に任せていればほとんどないままで終わってしまう。日本人学校に来ているたいていの子供は私と似たような環境の中にある。ポーランドに住んでいながら、日本語だけで生活に不自由さを感じないからである。

92年９月から、私の子供はポーランドの幼稚園に受け入れてもらって通園していた。元幼稚園教諭の妻に言わせれば、日本の幼稚園よりもずっと面倒見が良いという。また、言葉も通じない外国人を受け入れるにはいろいろな障害があるはずなのだが、それを知りながら入園させてくれたポーランドの国の人に大きな感謝の気持ちを感じずにはいられない。もちろん私の子供が入園したために、入園できなかったポーランドの子供がいるはずなのだから。

ポーランドの幼稚園で

家で娘の口から、アネータ、トーシャ、パベウ、コングラート、ピヨトルなど友達の名前が出てくるにつけ、この国の言葉をひとつでも多く知りたい、また、遊びと結びつけた形で日本人学校の児童・生徒に自然にポーランド語を学習させたいと私の気持ちは固まっていった。

3）ワルシャワ日本人学校の親と子供たちの実態

(1) 日本人の生活と言語環境（前掲）

- 子供たちの生活の中にポーランド社会とのふれあいが極端に少ないこと。
- 派遣教員の現地社会への適応の仕方。
- ポーランド語を話す必要性。
- ポーランドへの偏見。

（便利さになれた日本人、ポーランドの印象、ポーランドをまるごと受け入れることの難しさ）

(2) 日本以上に日本にこだわる日本人

私がこのワルシャワ日本人学校に赴任して感じたことがある。それは、日本を離れて暮らしているのに、また、逆に言えば、日本を離れて暮らしているからこそ『日本以上に日本らしくありたいとにこだわる』という奇妙な現象が生ずるのではないかということである。

このワルシャワでも、日本人は奇妙な、そして、狭い範囲の中で独特の日本人社会を造りあげている。その枠をはずれて生活していくことは、物のない数

年前のポーランドでは、その家族の大げさに言えば死を意味していたのかもしれない。好むと好まざるにかかわらず、日本人社会には迎合して生きるしかなかったのかもしれない。しかし、そこにゆがんだ日本人社会が生まれ、ポーランド社会になじもうとせずに暮らしていく日本人の姿が浮かんでくる。

前述したように子供がポーランド社会をむやみに非難したり、ポーランド社会やポーランド人を見下げたりするといういびつな考えになるのも、この大人社会の矛盾があったからに違いない。

しかし、そんな時代はもう過去のものとしていかなければならないし、西側諸国の物品が雪崩のように流入している現在においては、過去の物となったといっても良いかもしれない。

こんな話を聞いたことがある。「数年前までは、日本人会のパーティーがある時には、その会場に入る順番まで決められていた。つまり、大使館関係者が1番で、商工会関係者が2番、日本人学校関係者は3番目、つまり1番下にランクされていた。」というのである。

このようなゆがんだ社会の中では、育つはずの子供もしおれ、異文化の中に積極的に入っていこうという気持ちが生まれるはずもない。

(3)　日本人学校の遊び

私は中学校畑出身のこともあり、子供たちと遊ぶのが余りうまくない。性格にもよるのかもしれないが、小学校から赴任してきた先生は本当に子供たちと遊ぶのが上手だなあと感心する。校庭の狭い日本人学校の中で、子供たち（小学校1年生から中学校3年生まで）はいったいどんな遊びをしているのか。夏場、冬場に分けて考えてみよう。

- 夏場…鬼ごっこ、ドッジボール、鉄棒、砂場遊び、サッカー、季節の木の実採り、リンゴ（ポーランドの遊び）
- 冬場…雪合戦、かまくら作り、追いかけっこ、将棋、五目並べ、読書、ピンポン野球

かまくら作り（水で雪を固めて）

こんな遊びを小学校1年生から中学校3年生まで一緒になってやっているのだから可愛いものである。つっぱりのお兄ちゃんが入学してきたって、1か月もすれば、低学年と一緒に鬼ごっこをやっている姿が良く似合うようになっていることだろう。

しかし、上記の遊びの中で、ここポーランドでの独特な遊びは1つしかない。もちろんポーランドの子供たちが学校でどんな遊びをしているかなんてことは、ほとんどの子が知らないことになる。

「この9学年にまたがる子供たちが一斉に遊ぶことができて、かつポーランドに親しむことのできるようなものが何かないだろうか？」と考えたとき、私の頭の中に浮かんだものが、かるたであった。

(4)『ワルシャワ日本人学校』とは？

1年目も2学期を過ぎると学校の動きに少し慣れ、周りが見えてくる。ある時、素朴な疑問が私の中に起こった。それは、ポーランドという国の中にある『ワルシャワ日本人学校』は、日本の学校や他の日本人学校と何が違うのかという疑問である。

なぜならば、海外で暮らし、日本人学校にわが子を入れる親の多くの願いは、日本に帰った時に日本の子供以上に学力をつけておいてほしいという気持ちで日本人学校に子供を入れるからである。そうでなく、海外で暮らすことがこれから先も考えられる親は、アメリカンスクールに入れるし、実際、ワルシャワでも2通りに親の考えが分かれていたと思う。

92年にワルシャワ大学に客員教授として1年間赴任された塚本先生（本人が日本人、夫はイギリス国籍のポーランド人）には、小学5年生の一人娘がいた。この児童、塚本クレオさんは、日本では『外人』といって随分いじめられ、つらい思いをしたようである。そして、ポーランドに来て（本人は日本語・英語は自由に話せるがポーランド語はほとんど話せないのに）、けなげにも「お父さんの母国の言葉に触れたい」と約半年間現地校へ通い続けた。しかし、ここでも言葉の壁は大きく、93年5月に日本人学校へ正式入学したような例もある。

今日、ワルシャワタイムで6年生の塚本クレオさんがこんな発表をした。

（塚本クレオさんの入学1年後のスピーチである）

「私は、ワルシャワは嫌いでした。それは、母がワルシャワ大学に赴任するまでお父さんと2人で生活をしていたことと関係があります。私は半年間言葉も分からないワルシャワの現地校に通いました。それは、お父さんの母国である国の言葉を知りたかっ

たからです。しかし、学校では言葉も分からなくて困りましたし、買い物も近くのバザール（露店）でしました。父も言葉をずいぶん忘れていて苦労しました。私は、このおかげで、ゆで卵を作るのが大変上手になりました。この頃の私は、ポーランドは汚くて、不便で、物はないし……嫌いでした。しかし母が赴任して、一緒にもとの生活が始まって、日本のように「外人、外人」といっていじめない日本人学校に来て、ポーランドが好きになりました。私は、人の考え方は、その人の環境によってずいぶん変わるのだなあと思いました。」

この発表を聞いて、私は、この子はすごいなあと感じました。よく日本は豊かだといわれます。その生活を基準にすれば、ポーランドに来た日本人は、まず初めになんて不便な国だと感じ、そして、ワルシャワの街自体が灰色で、汚いとたいていの人が思うに違いありません。

しかし、その印象を長い間持ちすぎて、結局ポーランドになじまないで、ポーランドを理解できずに帰国してしまった日本人が多いのではないかと思います。

さて、1年目の私の印象はこのワルシャワ日本人学校はひょっとしたら学校というより塾に近いのではないかということであった。形だけ、週1時間ポーランド語の時間を組み入れたところで、学校としてポーランドに親しむ努力はしていないと思えるし、このまま日本に学校を移したとしてもなんら不自然なところはないと思えたからである。

何とか日本人学校の子供たちの言語環境を変えたいものだとつくづく考えさせられた。

4）ポルスクがるた作成のために

以上のようないろいろの要因が混じりあって、私は私の発想を実現すべく、「かるた」作りに取り組み始めた。しかし、具体的には次の6点を基準にして作成することにした。

① 児童・生徒が生活の中で使えそうな単語を捜し出す。
② 文章ではなくて、生活単語で考える。
③ 読み札には、その単語の意味を簡単に入れる
④ 取り札にはポーランド語とその日本語読みを入れる。
⑤ 小学1年生にも分かるように、その単語を目で見て理解できるようにする。
⑥ 覚えやすいようにできるだけ対になる言葉で考える。

見本も何にもないので、『基本ポーランド語会話集』や『ポーランド語辞典』（白水社）、ポーランドや他の日本人学校の会話集などを参考にしながら言葉選びを始めた。しかし、いくら生活の中で使う単語といっても、数詞ばかりとか、色ばかりとか木の名前ばかりとか、子供たちに興味のない単語では児童・生徒がますますポーランド語から離れてしまう。

この「かるた」で興味を持って遊んでくれるために、すぐ使える日常語を、あいさつ編・質問編・天気編・曜日編・形容詞編・言語編・誘いの言葉・返事編というブロックごとにして言葉集めをした。

そして、下の2つのことに留意して作成していった。

① 5・7のリズムで、調子よく声にだし、覚えやすいように作ろうとしたこと。
② 初めに日本語の意味をだすことでポーランド語をイメージさせ、後でポーランド語を読むようにしたこと。

いくつか読み札の例を挙げてみる、

あいさつ編（例）

1．こんにちは　いつも元気に　ジェンドブリ
2．さようなら　明日もまたね　ドヴィゼニア

天気編（例）

1．寒いなあ　今日はとってもジムノです。
2．暑いです　夏はやっぱりゴロンツォね。

また、かるた自体についても、生徒の頭の中にポーランド語を思い浮かばせるにはどうしたら良いのかを、何度も自分でかるたの札を想像しながら考えてみた。

取り札は、子供たち自身が目で見ることになるので、ポーランド語が前面に出るように工夫し、読み札は、音声で子供たちの耳から入るので、初めに日本語の意味が聞こえ、次にポーランド語が聞こえてくるように作っていくことにした。

つまり、ポーランド語を知っている子供が早くかるたを取れるように考えたのである。

また、中学生にも興味がわくように言葉の遊びも取り入れようと試みた。そして、自分たちでかるたに色をつけさせ、そのかるたは自分たちの学年で大事に使おうという意識を持たせた。

以上のような形で試行錯誤しながら完成した「ポルスクがるた」が次にあげるものである。ポーランド語への翻訳は、ヴェロニカ・リフォフスカ先生、絵の制作は増岡亜紀先生によるものである。

1
こんにちは
いつも元気に
ジェンドブリ

3
さようなら
明日もまたね
ドヴィゼニア

4
おやすみと
よいこはいつも
ドブラノッツ

7
ありがとう
気持ちを込めて
ジェンクエン

10
なんですか
人に聞くとき
スーハムと

11
これは何
分からない時
ツォトイエスト

12
いくつです
年を聞くには
イレマシラット

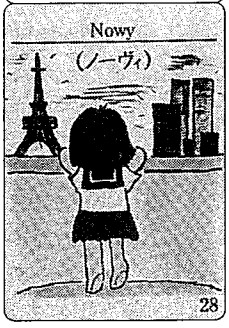
13
寒いなあ
今日はとっても
ジムノです

14
暑いです
夏はやっぱり
ゴロンツォね

23
日曜日
父さん疲れて
ニェジェラ

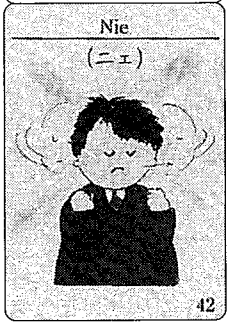
27
古い町
とてもきれいな
スターリミアスト

28
新しいことを
知ろうよ
背ノーヴィして



40
「はい」とね
返事をしよう
タクタクタク

42
「いいえ」なら
返事はきっぱり
ニェという



43
家までね
送ってくれて
ドドムありがとう

旧ポルスクがるた

いくつかの必要な言葉をかるたにして、遊びながら覚えようとの試み第一作のものです。名詞は限りなくありますので、名詞以外のものを中心にして、生活の中で使う言葉を拾ってみました。また、曜日編などは、だじゃれをつかって言葉遊びを取り入れたものもあります。ご家族でも遊びながら試してみていただければ幸いです。

1、あいさつ編

1、こんにちは　いつも元気に　ジェンドブリ
2、こんばんは　出会った人に　ドブリヴィエチェル
3、さようなら　明日もまたね　ドヴィゼニア
4、おやすみと　よいこはいつも　ドブラノッツ
5、ごめんなさい　足を踏んだら　プシェプラシャム
6、バイバイと　気軽に言おう　はい　チェシチ
7、ありがとう　気持ちを込めて　ジェンクエン
8、いただきます　大きな声で　スマチネーゴ
9、お願いを　する時言おう　ポプロシェン

2、質問編

10、なんですか　人に聞くとき　スーハムと
11、これは何　分からない時　ツォトイエスト
12、いくつです　年を聞くには　イレマシラット

3、天気編

13、寒いなあ　今日はとっても　ジムノです
14、暑いです　夏はやっぱり　ゴロンツォね
15、雪が降る　雪合戦だ　パダ　シニェグ
16、雨が降るかな　ベンジェデシチ

4、曜日編

17、月曜日　学校行こう　ポニジャウエク
18、火曜日　いっぱい食べて　フトレク
19、水曜日　綱引き頑張れ　赤　シロダ
20、木曜日　少し疲れて　チヴァルテク
21、金曜日　ジャンプをしよう　ピョンテク
22、土曜日は　遊ぼう遊ぼう　あ　ソボタ
23、日曜日　父さん疲れて　ニェジェラ
24、昨日はね　おなか痛くて　フチョライ
25、今日は　パーテーするよ　かんジシャイ
26、明日また　大きな声で　ユートロ

5、形容詞編

27、古い町　とてもきれいな　スターリ　ミアスト
28、新しいことを　知ろうよ　背　ノーヴィして
29、楽しいのに　どうしてなくの　ベソウィして
30、痛いとき　すぐにかこうよ　ボリボリと
31、明るい子　あいつはおもしろい　ヤスニ
32、暗い部屋　みんなとっても　ねむ　チェムニ
33、赤い色　止まりなさいと　チェルヴォニ
34、しょうがない　みんなでここで　お　シュコーダ

6、言葉編

35、日本語は、とても楽しい　ヤポニスキ
36、英語でね、書かれた本を　アンゲルスキ

7、誘いの言葉

37、遊ぼうよ、風船壊れて　バフムシェン
38、おいでよね　ホッチへ行っては　だめですよ

8、返事編

39、おいしいな　本当にこれは　スマチニ
40、「はい。」気持ちよい返事をしよう　タク
41、ありません。ここには何にも　ニェマです。
42、「いいえ。」返事はきっぱり　ニェという。

9、名詞編

43、家までね　送ってくれて　ド　ドムありがとう
44、小学校　シュコーワ　勉強するとこよ
45、道路にね　ドゥロガ　いっぱい落ちてるよ

新ポルスクがるた

1で示した文型に2の動詞をそのまま組み合わせていくとすべて文章となります。また、動詞は覚えやすいようにできるかぎり反対語と組になるように紹介してあります。

1、短文編

1、書いて下さい。プロシェン　ピサチ
2、見ていいですか。チ　モジナ　ゾバチチ
3、私は知りたい。フツェン　ヴィェジェチ
4、使っちゃいけない。ニェ　ボルノ　ウジバチ
5、手伝って下さい。プロシェン　ポマガチ
6、食べていいですか。チ　モジナ　ズイェシチ
7、電話をかけたい。フツェン　ズボニチ
8、捜して下さい。プロシェン　シュカチ
9、飲んじゃいけない。ニェ　ボルノ　ピチ
10、歩きたいのならこう言おう。フツェン　ホジチ
11、理解して、分かって下さい。プロシェン　ロズミェチ

2、動詞編

12、始めるよ　準備をしてね　ザチナチ
13、終わるとき　きちんとかたづけ　コンチチ
14、良く動く　体を持とう　ルーシャチ
15、よく止まる　フィアットやだな　スタバチ
16、靴を履く　かかと踏まずに　フクワダチ
17、靴を脱ぐ　ちゃんとそろえて　ズデイモバチ
18、電気をつける　パチンと明るく　ザパラチ
19、電気を消す　スイッチ押して　ガシチと
20、話すなら　大きな声で　ムービチ
21、聞くときは　みんな静かに　スーハチ
22、立つときは　スクッと元気に　スタチ
23、座るのも　きれいに早く　シャダチ
24、勝つことで　元気になれる　ヴィグリバチ
25、また負ける　さみしい気持ち　プシェグリバチ
26、会う時は　あいさつしよう　スポティカチシェン
27、別れると　さみしいけれど　ロスタチシェン
28、起きるけど　まだ眠たいよ　フスタバチ
29、もう寝るぞ　早起きしよう　イシチスパチ
30、登るとき　汗をかきかき　フスピナチ
31、下りるのも　気をつけなさい　スホジチ
32、入るとき　ノック忘れず　ベイシチ
33、出るのには　出口を通って　ヴィシチ
34、開けるとき　ドアをぱたんと　オトゥフィエラチ
35、閉めるとき　しずかにそっと　ザミカチ
36、よく笑う　楽しいときは　シミャチシェン
37、泣くときは　涙ポロポロ　プワカチ
38、行くときは　みんな並んで　さあイシチ
39、帰るなら　あとかたづけして　ブラッァチ
40、買うときは　ゆっくり考え　クポバチ
41、売るのなら　バザール　出そう　スプシェダバチ
42、喜ぶときは　みんな一緒に　チェシェチシェン
43、悲しむときは　彼氏の胸で　チェルピェチ
44、壊すなら　派手に壊そう　ニシュチチ
45、直すのは　大家に頼もう　ポプラビアチ
46、出発する　楽しい旅だ　ヴィイェジジャチ
47、到着する　無事についたよ　プシイェジジャチ
48、質問をするなら　はっきり　ピィタチ
49、答えるよ　きちんと正しく　オドポヴィアダチ
50、教えるよ　一度で覚えて　ウチチ
51、習うのは　とても楽しい　ウチチシェン
52、覚えると　自信がわくよ　ザパミェンタチ
53、忘れるよ　紙にメモして　ザポミナチ

5）新「ポルスクがるた」へ

「ポルスクがるた」を日本人学校の子供たちと実践しながら、手ごたえを感じ、次のかるたづくりへの意欲が湧いてきた。今の「ポルスクがるた」では、言葉の数も約50と限られている。もっと会話も取り入れ、生活の中ですぐ使え、遊びの要素より発展性のあるものを作りたいという欲が出てきた。

そこで、次に、実用的な動詞を中心にした「新ポルスクがるた」作りに挑んでいくことにした。

ポーランド語は母音の数7（うち鼻母音2）に対して子音36という多さであり、聞き慣れないうちは耳障りになることもあるが、その代わりヨーロッパの街角で道行く人々の話からポーランド語を聞き分けることはそう難しくはなさそうである。ポーランド語はまた語形変化の多い屈折言語で、名詞は男、女、中の3性の単数、複数にわたって7つの格を持つ。そして格変化にさいしては子音交換がしばしば生じる。さらに活動体、不活動体の区別、男性名詞活動体複数における男性人間形の区別等々。かくしてポーランド語はスラブは言語だけでなく、ヨーロッパの言語の中でも最も難しいものの1つとされる。だから、ポーランド人たちも、われわれが片言で話しかけるだけで、お世辞半分とはいえ、よくまあ難しいポーランド語を、と目を細めてくれるのである。（中略）

ポーランド人たちは歴史的体験でつちかわれた愛国心が強く、またポーランド語を誇りにしている。おまけに彼らはスラブ人特有のもてなし好きの点ではどこにもひけをとらない。（「世界の言語29ポーランド語　世界中の街角で」吉上昭三より）

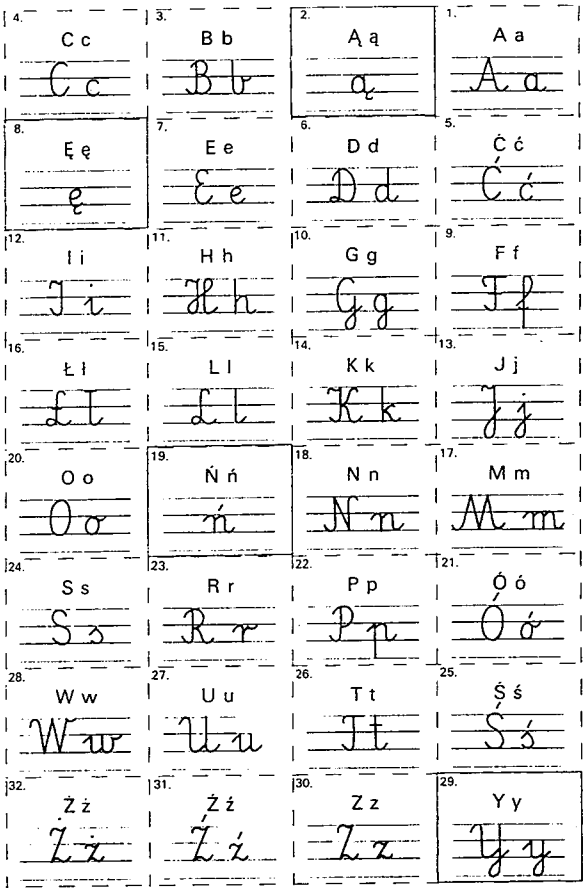
日本人にとっては、ポーランド語は動詞はもちろん名詞までも複雑に変化する、大変難解な言語である。

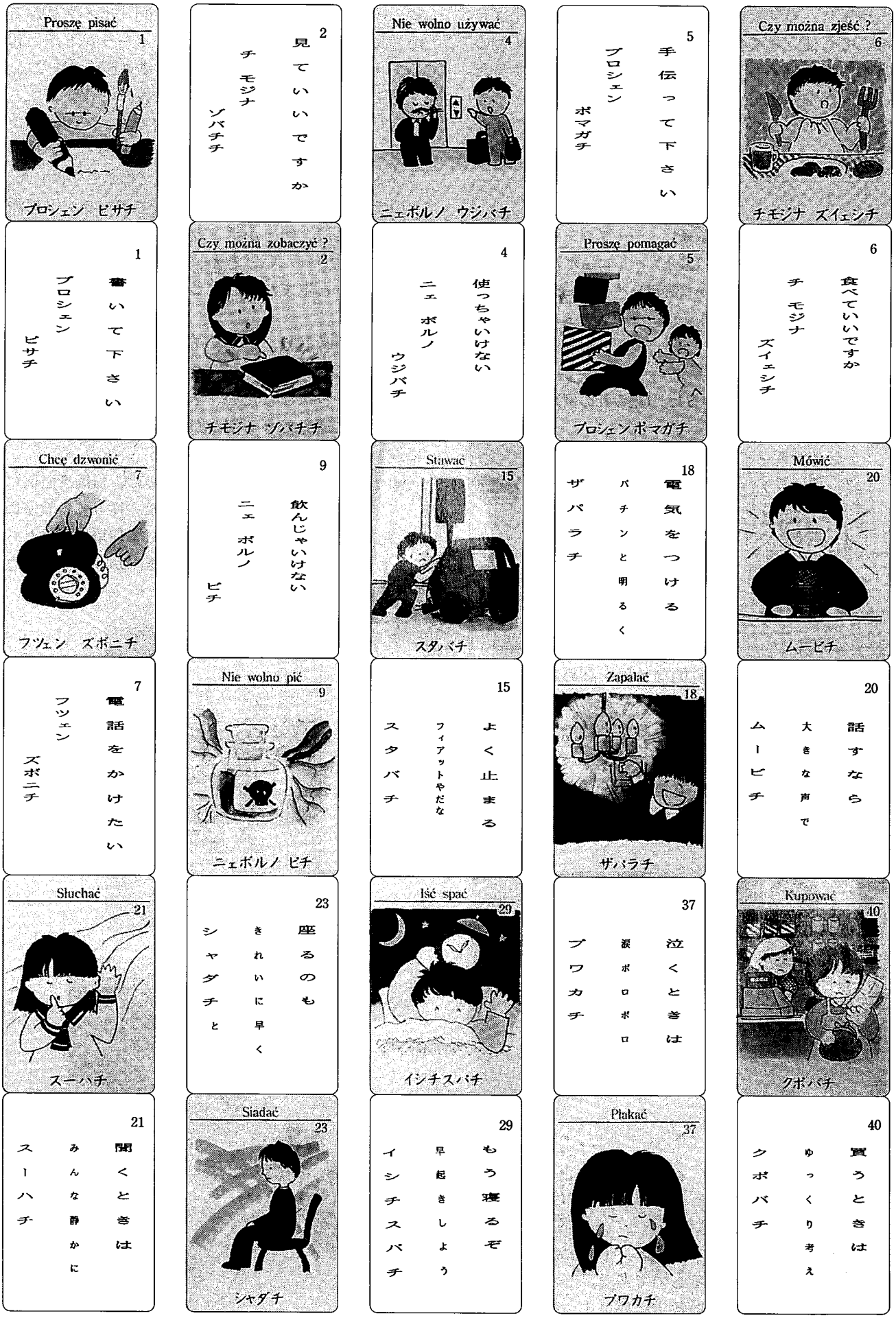
（例）女性名詞「ゆうか」という名前が、ユウカ、ユウキ、ユウケウン、ユウコンの様に変化していくのである

ポーランド語への切り口として、まずは動詞を中心にして、動詞を原形のままで文章にできる4つの基本文型を盛り込んだことが、今度のかるたの大きな特色となっている。

ポーランド語のアルファベット（ポーランド小学校の教科書より）

Alfabet




Proszę pisać
1
プロシェン ピサチ
2
見ていいですか
チ モジナ
ゾバチチ
Nie wolno używać
4
ニェボルノ ウジバチ
5
手伝って下さい
プロシェン
ポマガチ
Czy można zjeść ?
6
チモジナ ズイェンチ
1
書いて下さい
プロシェン
ピサチ
Czy można zobaczyć ?
2
チモジナ ゾバチチ
4
使っちゃいけない
ニェ ボルノ
ウジバチ
Proszę pomagać
5
プロシェンポマガチ
6
食べていいですか
チ モジナ
ズイェシチ
Chcę dzwonić
7
フツェン ズボニチ
9
飲んじゃいけない
ニェ ボルノ
ピチ
Stawać
15
スタバチ
18
電気をつける
パチンと明るく
ザパラチ
Mówić
20
ムービチ
7
電話をかけたい
フツェン
ズボニチ
Nie wolno pić
9
ニェボルノ ピチ
15
よく止まる
フィアットやだな
スタバチ
Zapalać
18
ザパラチ
20
話すなら
大きな声で
ムービチ
Słuchać
21
スーハチ
23
座るのも
きれいに早く
シャダチと
Iść spać
29
イシチスパチ
37
泣くときは
涙ポロポロ
プワカチ
Kupować
40
クポバチ
21
聞くときは
みんな静かに
スーハチ
Siadać
23
シャダチ
29
もう寝るぞ
早起きしよう
イシチスパチ
Płakać
37
プワカチ
40
買うときは
ゆっくり考え
クポバチ

つまり、覚えた動詞をそのままの形で、変化させないでも使える文型を扱ったのである。この４つの基本文型を覚えれば、あとは動詞を入れ替えするだけで、かなり自分の意思を相手に伝えることができるようになるはずである。その文型とは、次の４つである。

４つの基本文型

①～してください（依頼）……プロシェン
②～してはいけない（禁止）……ニェボルノ
③～してもいいですか（許可）…チ　モジナ
④～したい（欲求）……フツェン

新「ポルスクがるた」（読み札の例）

1．書いて下さい。
……プロシェン　ピサチ
2．使っちゃいけない。
……ニェボルノ　ウジバチ
3．見ていいですか。
……チ　モジナ　ゾバチチ
4．私は知りたい。
……フツェン　ヴィェジェチ

また、取り札では視覚的な効果を高めるために、取り札の下部に日本語を移動させた。

そして、今度は、小さなかるただけではなく、Ａ４の大型かるたも同時に作り、全校で一斉に源平合戦をして楽しむこともできるようにした。この大型かるたは、もちろん全校生徒の手で作ったものである。

６）まとめ

新・旧「ポルスクがるた」は、日常の学校生活の中で常に児童・生徒の手の届くところに置き、児童・生徒がそれで遊びながらポーランド語に親しむことができてこそ価値があるものである。しかし、手作りのかるたではせいぜい各学年部に１つを作るのが精一杯であった。これでは月に１回「ポルスクがるた」大会を開いても、生徒たちをポーランド語に親しませ、定着させていくことはあまり期待できない。

そこで、このかるたを本格的にカード化することにした。それも、ポーランド国内ですべて印刷しようという初の試みである。完成度もどのくらい期待できるか分からないので、私個人で作ることにした。

以上の試みは、国語科教員としてポーランドに派遣された私が、何とかポーランドと日本人学校の子供たちを近づけたいと考え、たくさんの人々の手を借りてやっと生まれたひとつの語学教材作りの実践例である。

我々派遣教員は、まず、その国を丸ごと受け入れる心を持ちたい。そして、たくさんの人々と出会い、その国を好きになりたい。そうすれば、そこから児童・生徒に還元できる何かが、きっと生まれてくるに違いないと、いま感じている。

(注)　このかるたの印刷が完成したのは、帰国を直前にした94年になってからであった。従って各教室においていつもかるたが手に取れる環境に子供たちをすることはこの時点ではできなかったのが残念である。

ポーランド紹介5

ポーランドの月の名前

「ポーランドの月の名称はなかなか情緒がありますよ。」今年の夏休みの後半に、BROK という田舎町（ここにワルシャワ大学の岡崎先生の別荘があり、そこに1泊したわけですが）に行き、岡崎先生と静かな森に囲まれた小道を散歩しているときに、話を聞かせてもらいました。

それをきっかけにして、日本人学校のヴェロニカ先生に調べてもらい、ポーランド語の授業の中で子供たちに教材の1つとして使っていけるものを作ろうということになりました。

1　月

STYCZEN　スティチェイン

TYKA（ティカ）とは、『長いさお・細長い棒』という意味を持っています。1月には、ポーランドの農家では、この棒を使って特別な仕事をしていたところから来たようです。

2　月

LUTY　ルティ

古いポーランド語で、LUTY とは『寒さが厳しい』という意味です。そういえば、2月に日本人学校ではスケート大会をするのですが、私の赴任する直前の1991年2月には、マイナス20度になったということでした。その後は、マイナス15度くらいですね。

3　月

MARZEC　マジェツ

ラテン語から来た言葉で、ラテン語では月ごとに神々の名前をつけていました。3月は、マルスという戦争の神様の名前がつけられています。

4　月

KWIECIEN　クフィェチェイン

これは、ポーランド語の花という言葉、kwiat（クフィアト）から来ています。花屋さんの看板を見て下さい。この文字がかかれていますよ。つまり、花が一斉に春の喜びを感じて咲き乱れる季節ということです。

5　月

MAJ　マイ

元は、ポーランドのどこでもある普通の草の名前だそうです。このすばらしい季節になると、ポーランドはすべてみずみずしい緑に包まれ、命のすばらしさを感じます。

6　月

CZERWIEC　チェルヴィツ

CZERW（チェルヴ）は『みつばちの幼虫』のこと。6月は、この幼虫がかえる時期なのです。また、みつばちの幼虫は、赤い色をしているのだそうです。そこから、チェルボーネという赤い色を表す言葉も生まれてきました。

7　月

LIPIEC　リピェツ

ポーランド語でLIPA（リパ）は『6月の終わりに咲く菩提樹（しなの木）の花』を意味します。この花が見られるようになると、夏の始まりとなるのかもしれませんね。

8　月

SIERPIEN　シェルピェィン

SIERP は『鎌』、日本の鎌と違って、刃がもっと丸い鎌です。旧ソビエトの国旗を思い浮かべて下さい。昔は、麦の収穫にもこの鎌を使いました。

9　月

WRZESIEN　ヴジェシェィン

ポーランド語で秋を告げる花、それは紫色のかれんな小さな花、ヴジョス（wrzos）。ヒース、この花が群れて咲くころ秋の風がふいてきます。

10　月

PAZDZIERNIK　パジヂェルニク

PAZDZIERZ（パジェジ）という『空気中にこの時期漂う白い糸のようなもの』（リンネル・亜麻糸のことか？）から来ています。

11　月

LISTOPAD　リストパト

ポーランドの郵便箱を見て下さい。そこには、list と書かれています。list（リスト）は、今は手紙の意味ですが、元は秋の木の葉からきています。樹木の木の葉が一面に敷かれ、黄金の秋を告げた秋が終わるころ、いよいよ厳しい冬の到来です。また、opadac（オパダチ）は『落ちる』という意味。つまり、一面に秋の木の葉が降ってくる時期ということです。

12　月

GRUDZIEN　グルジェイン

gruda（グルダ）『凍土』、日本では考えられないかもしれませんが、一面の土が凍る零下の世界。マイナス5度から10度が普通で、もちろん雪が降っても手で握ることはできません。パラパラ、サラサラと落ちる雪。このぐらいのほうが、厳しいけれども、キーンと張りつめた静かな世界を作り出します。

冬ポーランド犬ぞり

ポーランド紹介6

おもしろポーランド語

歯の話1

日本語では、歯は1本でも歯。全部の歯も歯。ポーランド語は1本の歯はゾンブ、全部の歯はゼンビ。何だか日本語っぽいポーランド語ですよね。

歯の話2

日本でも「親知らず」が生えてくるときには随分痛みますよね。この「親知らず」のことを、ポーランド語ではゾンブ　モンドゥロシチといいます。「知恵の歯」と訳せるようですが、成長してから生える歯であるということに変わりはないようですね。

目の話

日本語では、目の名称として、白目・瞳ぐらいはみんな知っていますよね。では、瞳の中の外側の部分は何といいますか。

ポーランド語では、テンチュフカ（テンチャは虹という意味）といいます。薄いブルーの瞳の多いポーランドならではの名前のつけ方だなあと感心しました。

ロンパリ。余りいい言葉ではありませんが、瞳が少し外側にずれている人の目のことをこういいますね。ポーランドでも、発想はまったく同じ。「ひとつの目はモロッコを見て、もう1つの目はカフカス山脈（黒海の近く）を見ている。」って言うんですよ。（イエデノ　オコ　ナ　マロコ、ドゥルギ　ナ カウカス）

髪の毛の話

「赤毛の人は信用できない」という迷信がある。

この迷信にあるように、

この赤毛の色はきつねの毛の色。ここポーランドでもきつねはやはり人をだますものと考えられているようです。ですから、ポーランド語では（ルディリス）という言葉は、余り良くない言葉なのです。

また、赤い猿という言葉もあって、（ルダ　マウパ）これも人をからかう言葉となります。つまり、猿のようなやつ、意地悪なやつめという感じで。

日本の名前

学校に馬場先生が新しく赴任してきました。こちらでは、「私が馬場です」という自己紹介をするときに（イエステム　ババ）というのですが、ある日ポーランドの人にそう自己紹介をしたところ、周りのポーランドの人がクスクス笑っているのでいったいどうしたのかと不思議でならなかったそうです。

これは、ポーランド語にはBABAという言葉があって、辞書によると「軽蔑的に女、老婆」などを意味する言葉なのです。自己紹介を、「私は卑しい女です。」とすれば、周りは当然笑いますよね。

名古屋に帰る

昨年度帰任した増岡先生（女性）の故郷は名古屋でした。いよいよ帰任が近くなって、ポーランドの友人から、日本のどこに帰るのかと聞かれ、「ナゴヤ」といったところ、相手はびっくりしたとか…。

ポーランド語で「NAGOは裸で、むきだしで」という意味の言葉、「JAは私」という意味。2つをひとつにすると、『私は裸で…』となってしまうのです。ポーランド人もびっくりの話。

リスはキツネ

ポーランドには広く緑豊かな公園がたくさんあります。散歩する人も多く、木の陰からりすが顔をのぞかせている姿はかわいいものです。

思わず日本人は、「あっ、リス！リス！みてみて」などと叫んでしまうのです。ところがこれを聞いたポーランドの人は、びっくり顔。なぜかっていうと、ポーランド語では、きつねのことを「リス」と言うのです。

だから日本人は、ポーランドでは「りすはきつねと逆さま。」と覚えます。これを聞いたポーランドのワルシャワ日本学科の学生さん。日本の人と公園にいったときに、大きな声で自信を持ってこう説明したのです。「みなさん、見て下さい。スリですよ！」ってね。

だいじょうぶ？

日本人どうしの会話の中で、「だいじょうぶ？」って言葉は良く使いますよね。日本語を知らないポーランドの人に「ダイジョブ」っていったらひょっとして相手はあなたにキスしてくるかもしれませんよ。

なぜかっていうと、ダイ（～してください）ジョブ（鳥のくちばし）で少し下品かもしれませんが、キスしてっていう感じが込められてしまうのですから。

ワルシャワ大学日本学科で日本語を学ぶ学生

家に日本人から電話がかかってくると、「～ですか」「～ですか」を良く使います。それをかたわらで聞いていた父親、おまえは日本人と電話ではなすとき、どうして「デスカ、デスカ」（ポーランド語では板という意味）って何べんもいうんだい？

5．書道による国際交流（実践活動５）

1）はじめに

ポーランドに赴任して、私なりに国際交流しようと努めたことは「書道」を通じてであろう。

「国際交流」とは何かと考えた時、私は、第１番目には、その国を好きになる（まるごと受け入れる）ことから生まれてくるもの。

第２番目に、自分の利害を離れたところで、その国の人とともにできることをしていくこと。
のような気がする。

生徒に学校で「国際交流」をさせなければというけれども、形式だけの交流は何の意味もない。そして、自分自身の心の中にその国を軽蔑したり、日本と比較したりする心があるうちは難しい気がする。

また、自分自身がポーランドの友人を持たないでは、ポーランドのたくさんの人々との出会いを持たないでは、何もできないようにも思う。

私の場合、書道という日本文化を実技として身につけていたお陰で、ずいぶんと、ポーランドの人々とふれ合う機会が得られたように思う。

2）日本人学校書道教室

まず、私に与えられたのは、ワルシャワ日本人学校で取り組んでいる「書道教室」の中心となって、ポーランドのワルシャワ大学の学生たちに書道を教える機会であった。

ワルシャワは、93年でも在留邦人300名ほどしかいない小さな日本人社会であり、当然現地のポーランド社会と深くかかわっていく必要があった。学校発足当初から、日本人学校は様々な方々の手を借りて発展してきた。

その１つとしてワルシャワ大学日本学科がある。ここに勤務されている岡崎先生は、在ポーランド歴は20年を越し、学校発足当初は学校運営理事の１人として、日本人学校のあり方を考え協力してきた人である。

岡崎先生の別荘で

また、ワルシャワ大学日本学科はヨーロッパでも有数の日本語教育をしている大学としても名高く、今まで、その卒業生が、日本人学校の現地採用教員として学校を支え、商社で通訳として働き、プライベートの生活でも各家庭の家庭教師兼通訳として日本人の生活を支えてきている。

つまり、日本人とポーランド人のパイプ役を果たしてきたといえるだろう。

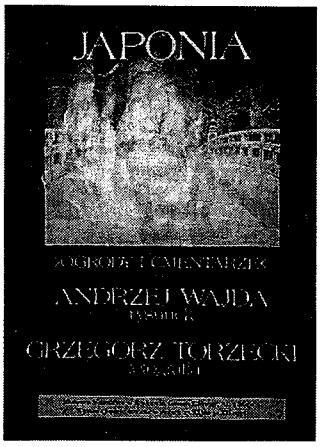
その日本学科と日本人学校は、教材に不自由をしていたころからお互いに支えあい手を取り合ってポーランド社会の中で生きてきた。また、非常に行動が限定される日本人学校教師が、現地の人とふれあいをもてる大切な場でもあった。だから、十数年、指導者や校長が変わっても大切な「国際交流」「現地理解」の場として続けられてきたのであった。

3）書道教室によって生まれてきたもの

この書道教室を進めていくことによって生まれてきたものがいくつもある。

①「出会い」1

まず第１番目に私に与えられたチャンスは、グジェゴシュ・トジェツキ氏という写真家との出会いであった。



展覧会ポスター

この写真家は、『日本の墓地』というテーマで写真を撮り続けている人であった。私が、書道を教えているということを大学から聞いてきたということで、自分の写真展をする時に、ぜひ書道、筆で書いた作品が欲しいという。それも、テーマと合うのは「小野小町の和歌」であって、「花の色は移りにけりないたずらにわがみよにふるながめせしまに」という歌を作品として書いてほしいということであった。

私は、かなよりも漢字の方がまだ好きで、一瞬、書けないと断ろうと思ったが、精一杯できる範囲で努力してみようと引き受けた。

このおかげで、展覧会にも招待を受け、日本でも有名な映画監督アンジェイ・ワイダ氏とも出会うことになろうとは想像もしないことであった。

この展覧会が、グジェゴシュ・トジェツキ氏の写真展とアンジェイ・ワイダ氏のデッサン展であったことは後で知ったのであった。

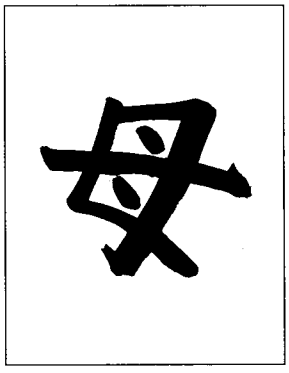
② 「出会い」2

次に与えられたのは、ポーランドの芸術家、レフ・ジュルコフスキー氏との出会いであった。彼は40才を少し越えたくらいの人で、近年「禅」の世界に興味があり、特に自分の作品も墨と筆を使って自然をテーマにしたものを書こうとしているということであった。

そこで、私が中心となって行っている日本人学校書道教室に参加したいというたっての希望で学校へやって来たのである。(勿論、ワルシャワ大学日本学科からの紹介である。) これが1991年の7月くらいであったろうか。彼と、ワルシャワ大学日本学科のアンナ、マルタの3人がこの後ずっと休まないで書道教室に通い続け、親しくつき合っていくポーランドの友人になったのである。

ジュルコフスキー氏は、非常に熱心な人で、私の言うことすることを少しも逃しまいと努力をし、学校が夏休みに入って、書道教室を休みにした間も、自分ひとりで勉強してみるから道具を貸してほしいというほどであった。

(初期の練習作品)



ジュルコフスキー氏のお宅にも、3回(内2回は妻や子供も一緒に) おじゃまして、ゆっくり話して帰るほどになった。もちろん、通訳は日本学科のアンナ、マルタであるが…。我が家にも2回ほど来てもらって、一緒に食事し楽しいひとときをすごした。

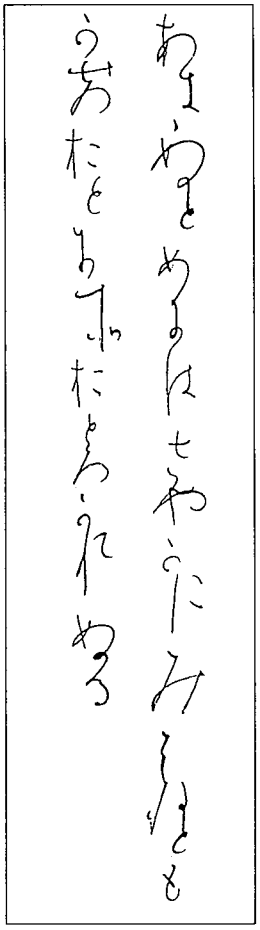
ジュルコフスキー氏のお宅にて

ジュルコフスキー氏のお宅は、郊外にあって、家も自分で修理し、増築したという。以前に描いていた油絵の作品を見せてもらったり、彫刻を見せてもらったり、時間の許すかぎり、自然や芸術について話すことになった。

(中期の練習作品)

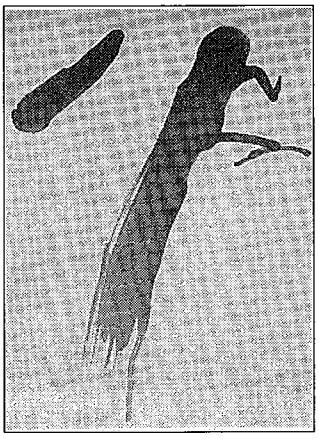
いかに熱心かは、この人の書道教室での作品や展覧会の作品を見てもらえば分かると思う。93年に入っても、もちろんジュルコフスキー氏との関係は変わらないが、私のもっている能力では荷が重すぎるなあと感じるようになってきた。それほどこの人の作品の変化、上達ぶり(筆による作品作り、テーマは「樹木」である) は、見事なものであった。

(後期の練習作品)

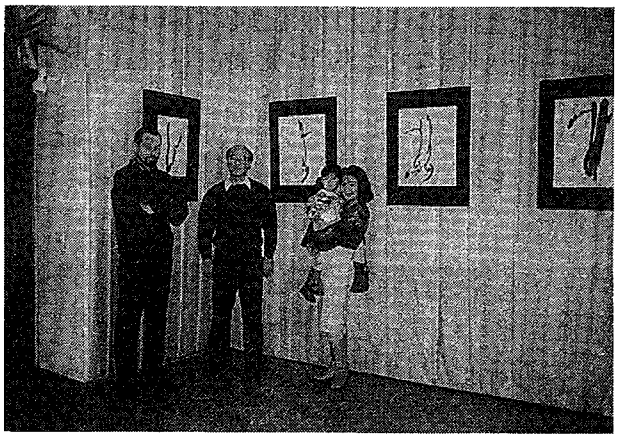


(展覧会の作品)

テーマ　樹木



ジュルコフスキー氏の展覧会にて



③　ワルシャワ大学からの贈り物

このジュルコフスキーさんのお陰で、日本人学校並びに私はワルシャワ大学の学長から、書道によってのポーランドへの貢献ということで感謝状（下記資料参照）をいただくことになったし、別稿に挙げたように、ポーランドの人々の前で、書道デモンストレーションをする機会を与えてもらうことになったのである。

ワルシャワ大学からの感謝状

REKTOR
UNIWERSYTETU WARSZAWSKIEGO
（ワルシャワ大学学長）

Warszawa, dnia 7 grudnia 1992
（1992.12.7）

Szanowny Panie Profesorze,
（御先生）

W imieniu Uniwersytetu Warszawskiego, którego częścią jest Zakład Japonistyki i Koreanistyki, pragnę wyrazić Panu Profesorowi serdeczne podziękowanie za lekcje kaligrafii japońskiej, które Pan Profesor prowadzi dla studentów japonistyki. Na tych lekcjach studenci japonistyki wzbogacają swoją wiedzę na temat kultury Japonii. Studenci i pracownicy Zakładu Japonistyki niezmiernie sobie cenią życzliwość i wielkie umiejętności Pana Profesora.

Medal Uniwersytetu Warszawskiego, który dziś wręczam Panu Profesorowi, jest wyrazem naszej wdzięczności dla Pana osobiście, a także dla warszawskiej Szkoły Japońskiej, której przyjazna współpraca z Zakładem Japonistyki ma już długoletnią tradycję.

Z najlepszymi życzeniami
（学長　アンジュイ・カイエタン・ブルブレスキ）

Prof.dr hab. Andrzej Kajetan Wróblewski

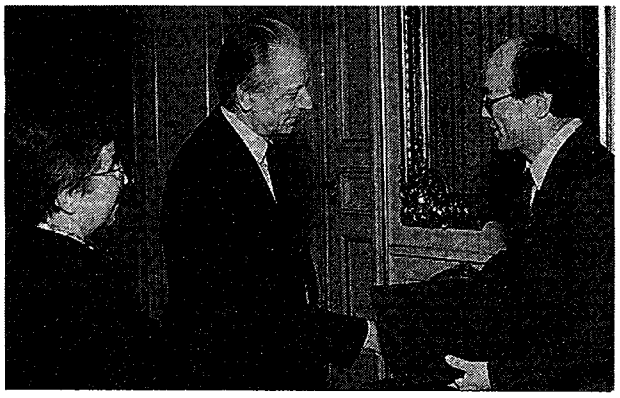
Pan Profesor
Manabu Teramoto
（寺本　学様）

日　本　語　訳

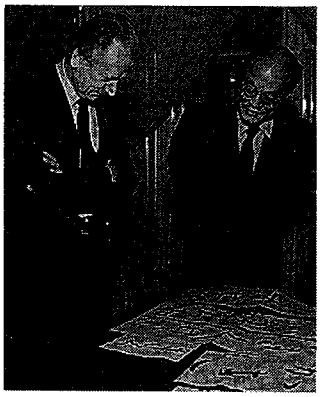
ワルシャワ大学に設けられている日本学科・朝鮮学科（東洋学科）に代わり、日本学科の学生たちに貴方が日本の書道を教えてくださっていることに、ワルシャワ大学の代表として御礼申し上げます。

この書道教室によって、日本学科の学生たちの日本文化への理解が深まり、日本学科の学生と教授は、貴方の技術と情熱に感謝しております。

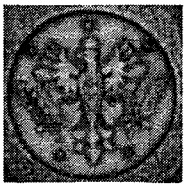
このワルシャワ大学の記念メダルは、貴方に対して、また、日本人学校に対しての私たちの感謝の印です。



ワルシャワ大学の学長から表彰



作品を紹介する



おもて

うら

メダル

ワルシャワ大学にて　記念撮影

④「出会い」3

次に与えられた出会いは、日本大使館の高橋さんの紹介によるものであった。それは、近々開店するという、ポーランドのアンティークの店の看板を書いてもらえないかということであった。『雅』（みやび）という店にするそうで、どういう字体が良いのか分からない私は、いくつか自分で気にいったものを書いて渡したのである。

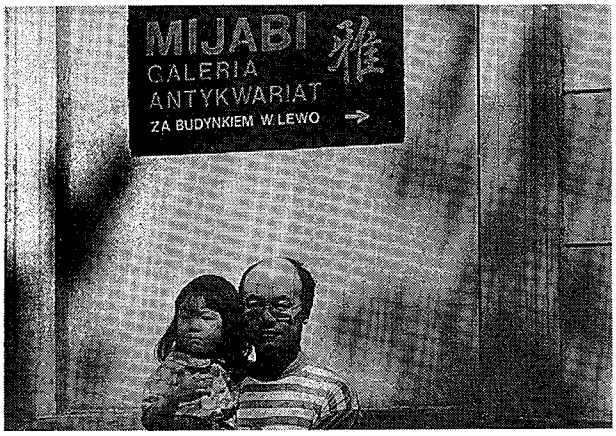
この店のご夫婦とも親しくさせていただくことになった。開店の時に、その開店祝いのパーティーにご招待いただいたり、時々ふらりと立ち寄ってみたり、1993年10月には日本文化月間のひとつとして、展示された『雅』のパーティーに家族でご招待いた

だくことになったりした。

この場に参加した日本人は、日本国兵藤大使閣下、大使館の関係職員、ワルシャワ大学の岡崎先生ご夫妻、後はポーランドの人々で、私の妻は、この時ワルシャワの市長と握手できたことが印象に残ったようだった。

⑤『雅』の看板を書く。

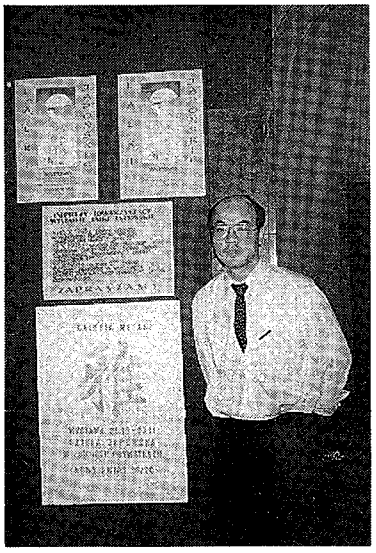
資料に挙げたのは、私の書いた『雅』の看板と日本文化月間でのポスターである。



『雅』の看板の前にて

ワルシャワにこのポスターが貼られてから、ずいぶん盗られてなくなったらしい。書いた本人としては嬉しい限りなのだが、作った方としてはどうなのだろうか。

それにしても、ポーランドという遠い国のノービーシュビアット（新世界通り）という繁華街の一角に私の書いた『雅』という看板が飾られているのは、いいものである。



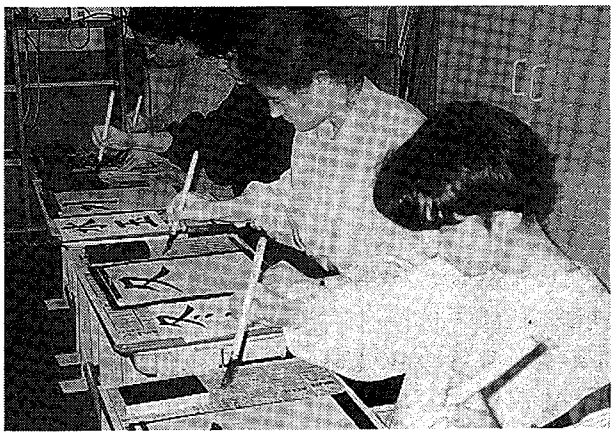
日本文化月間でのポスター

この先何年この街を飾ってくれるかは知らないけれども、私がこのワルシャワという街で暮らした1つの足跡として、永く残ってくれることをひそかに願ってしまう。

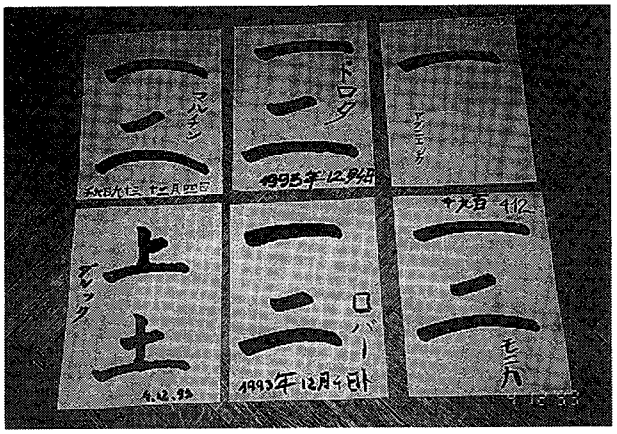
⑥「出会い」4

毎年のようにたくさんのワルシャワ大学の学生との「出会い」がある。1年目、1991年も、多い時にはのべ8名から10名ほどの学生たちが書道教室に通ってきたが、1年間を通して通ってきたのは4名にすぎなかった。しかし、1年を通して通ってきた学生は、やはりそれなりに書道に興味を持ち上達していったと思う。

2年目も延べ5名から6名ぐらいの学生が通ってきたが、その中で今も続いているのは1名のみである。



日本人学校での書道教室　練習風景



日本人学校での書道教室　練習作品

3年目になって、日本への留学から帰ってきたアンナ、マルタを加え、ジュルコフスキーさん、ヴィテック、オラ、などの不動のメンバー、それに新しく習いたいという男2人、女3人から5人を加え、多い時には11名を越すメンバーで書道教室が行われている。

⑦　ポーランドの人の力

学校での授業の中で教えるのと違っていることがたくさんあるように感じる。

第1に、この教室に通ってくるメンバーが自主的に来ていることである。

ある程度日本に興味を持ち、書の世界にも興味を持っているために、非常に話を理解し、努力しようという気持ちにあふれているのである。

第2に、メンバーが皆大人であるということ。

普通なら、先生と生徒という関係のみで終わってしまうのだが、おたがいに1人の人間と1人の人間としてつき合うことができるということである。

第3に、非常に理解力に優れていることが挙げられる。

ワルシャワ大学といえば、日本で言えば東京大学といえるだろうし、その中でも日本学科は名門中の名門。約70年の歴史を持ち、東欧ばかりでなくヨーロッパの中でも優れた日本語教育で名高いところである。その学生であるから、当然といえば当然である。

第4に、優れた通訳（ヴェロニカ先生）に恵まれたことである。

ある程度までは、片言の適当なポーランド語でごまかしがきくけれども、理論と実践と両方がかみ合わなくては上達しない領域が出てくる。その時に微妙なところまで伝えてくれる通訳がいるかいないかは大問題となってくる。

そして、ヨーロッパといえば合理主義的な考え方が多いように考えられるが、このヴェロニカ先生は自分の勤務時間を過ぎても嫌な顔ひとつしないでつき合ってくれたのだから本当に心から感謝している。

第5に、利害関係がないということである。

私は、これだけがお世話になっているポーランドにお返しできることかもしれないと、純粋に書道を愛する人が1人でも増えるように、接してきたつもりである。

自宅での練習風景

また、通ってくる人達も、書道が少しできるようになったからといってそれで得をするわけでもない。純粋に自分自身の成長を目指して、みんながやって来ているのである。

4）書道実技紹介

博物館（Etnograficzne）での書道実技紹介

93. 10. 23

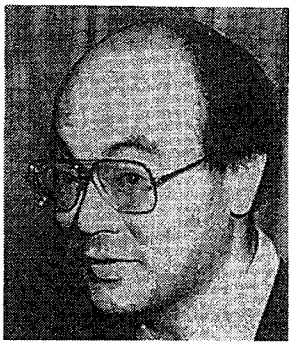
5時から始まる今日の書道デモンストレーションのために、会場である博物館に1時間前に道具をそろえていった。

2か月以上前に依頼はあったのだが、その時には、「ジュルコフスキー氏の展覧会がメインであって、その中で簡単に実技紹介をするのだなあ」と気軽に考えていたのだった。ところが、いよいよ時期が近づいてきた10月初めの日本人学校での書道教室のときに、ジュル氏がパンフレットの原稿を持ってやってきた。そこには、何と私の紹介が大きく載っているではないか。

Państwowe Muzeum Etnograficzne serdecznie zaprasza na **pokaz kaligrafii japońskiej** w wykonaniu Pana Manabu Teramoto - nauczyciela kaligrafii w szkole japońskiej. Pokaz odbędzie się **23 października 1993 r. o godz. 17⁰⁰ w Sali Konferencyjnej Muzeum w Warszawie przy ul. Kredytowej 1.**

Imprezie towarzyszy **wystawa malarstwa Lecha Żurkowskiego**, artysty zafascynowanego sztuką i kaligrafią japońską.

Prace można oglądać od 20.X do 30.X w Sali Konferencyjnej Państwowego Muzeum Etnograficznego.



Manabu Teramoto,
urodził się w Japonii, w 1955 r.

Studiował kaligrafię w Sosôin. W 1991 przyjechał do Polski razem z żoną i dwuletnią córeczką.

Prowadzi lekcje kaligrafii w Szkole Japońskiej dla dzieci pracowników Ambasady Japońskiej oraz dla grupy studentów Uniwersytetu Warszawskiego.

Za zaangażowanie w przekaz umiejętności oraz budowanie więzi kulturowych otrzymał jesienią 1992 roku, z rąk Rektora Medal Uniwersytetu Warszawskiego.

"Jestem bardzo szczęśliwy, że mogę uprawiać kaligrafię razem z Polakami - są oni bardzo pilnymi i serdecznymi uczniami".

書道デモンストレーションーパンフレット

パンフレット日本語訳

国立民族博物館

国立民族博物館は、会議室に、日本人学校の先生寺本学の書道デモンストレーションに招待します。10月23日午後5時から。書道デモンストレーションと同時に、日本の美術と書道に魅了された画家ジュルコフスキーの作品展覧会も行います。作品は20日から30日まで、ここで見ることができます。

ジュルコフスキー

1988年から東洋文化（特に禅の芸術）に興味を持ち始め、1991年から寺本学より書道を習い始める。彼の作品は、国立博物館、アジア太平洋博物館、アントニージョンサ記念財団に納められている。

寺　本　　学

1955年、日本に生まれる。書道は、書宗院にて研究した。1991年に妻と2才の子供をつれてポーランドに来た。日本人学校で、大使館の子供やワルシャワ大学の日本学科の学生を指導している。1992年秋、ワルシャワ大学の学長より、書道を教えたこと、文化のかけ橋の努力のため感謝状を受ける。

これは大変なことになったと、私は会場の下見に連れていってもらうことにした。

そこで、このイベントの企画者と出会って、23日のデモンストレーションは私の書道デモンストレーションがメインであるということ、この会場を精一杯使って書いてほしいということを聞かされ、ことの大きさに改めて驚き慌ててしまったのだった。

会場責任者からは、「できるだけ日本的な雰囲気の中で書いてほしいので、着物を着て書くことはできませんか。」とか「奥様が生け花ができれば、それで会場を飾って欲しいのですが。」とか依頼されだが（日本人であれば簡単にできるだろうという誤解があって)、娘に着物を着せてくることと、何点か私が書道作品を書いてくることで了解してもらった。

また、1時間ぐらいの話と実演を期待しているとのことで、プロでもない私が日本を代表して、このような大それたことをすることになってしまったことを後悔したが、もう後には引けないところにきていた。

そこで、ポーランドの、今まで書道を見たことも触れたこともない人達に、書道への入口を紹介し、少しでも日本を知ってもらえるきっかけとなればいいのではないかと考えることにした。

時間が近づくにつれ、ほぼ満席の状態となってきた。150人入る会場はいっぱいになっている。日本人は、ワルシャワ大学の岡崎先生夫妻のみで、通訳を頼んだ、日本人学校の同僚ヴェロニカ先生も緊張している。

まず、博物館のディレクトルからの挨拶と紹介があり、ジュル氏のひと言、そして、いよいよ私の番になった。

書道紹介準備原稿　1993年10月23日

1．書道とは

日本には『道（どう)』と呼ばれるものがたくさんあります。

先日、世界柔道大会で、ポーランドのクバツキさんが優勝した『柔道』もそうですし、そのほかに、合気道・剣道などは、皆さんも御存じでしょう。

それぞれの『道』は極めるのが非常に難しくそれぞれにプロフェッショナルが存在します。

私はプロフェッショナルではありませんが、書道を愛するものの1人として、みなさんに書道を紹介いたします。

（書道の大きな特色を2つに分けて今日は紹介します。）

2．書道の特色

1）道具

・まず、第1番目には筆を使います。これは多くは羊の毛やいたちの毛で作られています。

いろいろな大きさがあり（筆を手に取って）

これは、小筆。　　これは、中筆。

これは、大筆と呼びます。

・第2番目に、墨を使います。

この墨というのは、松ノ木などを燃やし、そのすすを集めて固めたものです。

・第3番目に、硯を使います。

硯は、墨を水ですって、液体化していくための道具です。

筆を手に取って　道具の説明

ここで、持ってきた墨を硯に移し実際に墨をするところを見てもらった。ポーランドの人達は、特に興味深くこの様子を見ていた。固体が液体化していく様子が珍しかったのかもしれない。

・第4番目に、紙が必要です。

墨をたくさん吸うもの、吸わないものさまざまあって、必要に応じて使い分けます。

ここで、ポーランドの「KAMI」という店で売っているドイツから取り寄せた和紙を何枚か見ている人達に渡して、さわってもらった。そのさわった感じの違いが書く上にも微妙な影響を与えるのだということを説明した。

そして、予定を変更して、「ここですこし書いてみましょう」と、「風」の文字を書いた。2通り、柔らかい風と厳しく強い風を説明しながら書いて、その後で、こう続けた。

2）表現上

第1番目にあげられるのは、全体の構成や文字の

形の美しさでしょう。
第2番目には、弱いとか強いという線自体の美しさ。
第3番目は、流動美とでも言える。作者の心から出たリズムが、音楽性を持って見えること。
第4番目に、特殊なことですが、余白の美しさを作り出すこと。
第五番目に、墨色の美しさ。
色彩を排除して、白と黒の2色の世界を作り出すことから。

ここで、持参した作品を見せながら、表現上の違いを簡単に説明した。同じ文字を書いても、作者のリズム—心の持ち様—の違いによっていくつもの作品が生まれること。また、古い伝統を持つもので、文字自体もずいぶん変化してきていることを象形文字の「山」と「女」という文字の変化で示した。

3．実用性と芸術性。
日本では、義務教育の中で、小学校3年生から中学校3年生まで週1時間ぐらい、筆を使って文字を書いていくことを教えています。この場合は、芸術性は求めず、実生活の中での目的に絞って教えます。
たとえば、文字ですから、正確に相手に伝えるために整った形を作る練習。文字を作る動きの練習をするわけです。
もうひとつは、先程話したように美しさを求めていく芸術的な部分。両面を持っているのです。

書きながら、会場の人々が一生懸命に私の実技を見ようとしている視線を強く感じたし、テレエクスプレスというテレビ局の番組に放送するということでテレビカメラはあるし、段々会場が熱気を帯びてきた。

「美」の字を書く

何とか説明も、実技も終わって、「最後にもう1度どの文字を書きましょうか。」といった時に、会場から『美』の字をもう1度書いてほしいとみんなが声をそろえて言ってくれた。

また、「筆を持って書いてみたい人はどうぞ出て来て書いてください。」といったとたん、たくさんの人（会場に来ていた大部分の人）が押しかけ、コレイカ（行列）ができてしまうほどであった。もちろん子供連れも多かったので小さい子供達も筆を使って書いて帰ってくれた。

筆を持って書くポーランドの人達

もっと驚いたのは、ぜひこの作品を買いたいとあわせて5人の人から言われ、返答に困ったことだ。その中に、ワルシャワ美術大学の主任教授がいたこと。書道に興味を持ってもらえればと、小さな作品を何枚か書いて、数人にプレゼントした。

盛況のうちに終わることができたのが、うれしかった。

家族でホテル「ソビエスキー」のカフェーでエスプレッソを飲みながら、こんなに後味のいい思いをさせてくれたポーランドの人々、特にジュル氏に感謝し、充実した1日を終えた。

その後ジュル氏は用事があってポーランド文部省に行った時に、私の書道デモンストレーションを「150人集まった会場は、大変盛況であった。みんなが書道というものに興味を持ってくれて、どこへ行けば習うことができるのかとずいぶん聞かれた。

この日所用で来ることができなかった友人が非常に残念がっていたこと。実技ばかりでなく、歴史や理論も入って大変おもしろい講義を受けていたようだ。」という、感想を述べてくれたようだ。

この話を聞いた11月2日。ジュル氏が23日のデモンストレーションの写真を持ってきてくれました。これも彼が友達の写真家に頼んで特別に撮ってくれたものである。

Ⅲ．おわりに

1）帰国を前にして

帰国まで後１週間となった日。ビッグニュースが飛び込んできた。何と、この私にポーランド国民教育省から勲章が贈られるというのである。もちろん、日本人では初めてのことであるという。

以前に「文化のかけ橋」として努力したということでワルシャワ大学学長から直々に表彰していただいただけでも身に余る光栄であったのに、信じられないニュースであった。

今回の受勲については、ワルシャワ大学の岡崎先生ご夫妻と書道を通しての友人ジュルコフスキー氏がなみなみならぬ働きかけをしてくださり、私の業績がふさわしいと認められてのことであるという。

MINISTERSTWO
EDUKACJI NARODOWEJ
LEGITYMACJA Nr. 60553

Nadaję Panu (Pani) Manabu
TERAMOTO
urodzonemu(ej) dnia 23.06.1955 r.
za szczególne zasługi dla oświaty i wychowania

„MEDAL KOMISJI EDUKACJI NARODOWEJ"

m.p.

MINISTER
EDUKACJI NARODOWEJ

Warszawa, dnia 9 marca 1994 r.

国民教育省　1994.3.9

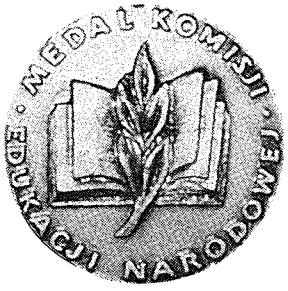
資格証明　60553

寺本学　1955. 6. 23生

国民教育メダル

ポーランド国民教育省

メダルおもて

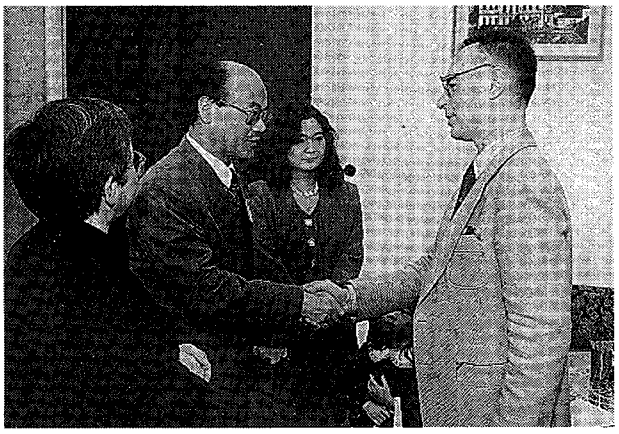


う　ら

私がポーランドに赴任して、日本人学校の教師であるとともに１人の人間としてポーランドの人達と接してきた証であるように思え、心から感激し、私を支えてくれた様々な人（もちろん、日本の人たちにもポーランドの人たちにも）に感謝の気持ちでいっぱいであった。

日本大使館からも高橋氏に列席していただいた。

ポーランド国民教育省からの勲章贈呈（家族で参列）



2）３年間のポーランド生活から

今まで述べてきた実践は今後改善の余地が多々あるものかもしれない。

しかし、私には現地の人々との様々な出会いがあった。その出会いが、ポーランドへの偏見を打ち消し、ポーランドに興味を持ち、好きになり、「ポーランド語でのスピーチ」や「ワルシャワタイム」、「ポーランド語での朗読・群読」や「ポルスクがるた」の実践となり、児童・生徒へと影響を与えることができたのではないかと考えている。

赴任するまでは、未知で遥かに遠い国だったポーランド。

今は、私の中で近くに息づいて、日本に帰国してからの実践を支えてくれている。

（てらもと　まなぶ・国語科／前ワルシャワ日本人学校教諭）